

新編國語辭典

金子薰園著

辭典

明治
45. 5. 25
内交

新編國語辭典

新編國語辭典

特ク
757

序

歌に手引は要らない、各自の感情のひびきが、自然に歌を成すものであると云ふ空漠な議論は、初期の研究者を迷はしめ、又誤らしめる。歌人は造られるものでないと云ふのは可い、併し生れ立ちから然った素質を持つて出て来て、ずうつと歌人になれる譯がない。其の素質が秀でたものならそれ丈け亦光らせる勞苦の多いことを思はなければならぬ。歌は自然を尙ぶと云ふ、それは誠に結構な言ひ條ではあるが、其の自然に流れてくる歌のころを養ふものが無ければなるまい。歌人と歌學者とは違ふ、學者にならなければ、歌は作れないと云ふのは間違つてゐるが、歌の上に要する普通の知識——之れは必ず有つてゐなければならぬ。此の普通の知識は、歌の瞳をあける爲めの準備である。各自の有つてゐ

る歌才を發揮させる爲めに開く端緒である。私は此の普通の知識を初期の研究者に供給しようとして、此の『作歌新辭典』を編述した。之はもと『和歌新辭典』と云つて世に問うたのに、更に多くの改訂を加へて、一層具體的に、一層研究者に接近させるように努めた。本書を讀んで、新しい歌に對する一般的の知識を得て、一首を描き、抒べる方法の一番捷徑を行く手引になることが出来れば、此の上もない幸である。然うして、諸君が早く本書から離れて、各自の賦才を自由に發揮せられむことを望んでやまない。

明治四十五年三月

著者

作歌新辭典目次

第一編 四季

(一) 春 二

▲時 令

- ◎立春.....三
- ◎春の曙—春の朝.....六
- ◎春日—春晝—遲日.....八
- ◎春の夕.....一一
- ◎春の夜—春の宵—春の灯.....一四
- ◎暮春—ゆく春.....一八

▲人 事

- ◎春興.....二一
- ◎雛祭.....二四

▲天 象

- ◎春雪—残雪—雪解.....二八
- ◎春風—東風.....三一
- ◎霞.....三四
- ◎陽炎.....三六
- ◎春雨.....三九
- ◎春月—朧月.....四二

目次

△地儀

- ◎春の山—山を焼く……………四五
- ◎春の野—野を焼く……………四八
- ◎春水—春川—春海……………五〇

△動物

- ◎鶯—雲雀—燕……………五四
- ◎雉子……………五七
- ◎蝶—蜂—蛇……………五九

△植物

- ◎春草—若草—若芽……………六二
- ◎梅—桃……………六五
- ◎椿—木蓮……………六八
- ◎梨—連翹……………七一

◎櫻花—落花……………七三

◎柳……………七八

◎躑躅—山吹—蘇枋……………八〇

◎菫—菜の花—櫻草……………八三

◎藤……………八六

△春 雜……………八九

(二) 夏……………九二

△時令

◎初夏……………九三

◎夏の夕……………九五

◎夏夜—短夜……………九八

◎暑—涼—納涼……………一〇〇

△人事

- ◎祭……………一〇三
- ◎更衣—浴衣—羅……………一〇五
- ◎扇—團扇……………一〇七

△天象

- ◎青嵐—薰風……………一〇九
- ◎夏の雨—五月雨—夕立……………一一一

△地儀

- ◎夏野……………一一四
- ◎夏の水(海、川、瀧、清水)……………一一六

△動物

- ◎杜鵑……………一一八
- ◎螢……………一二二

◎蚊—蚊遣—蚊帳……………一二四

◎夏の虫……………一二六

△植物

◎青葉—若葉—夏木立……………一二九

◎桐の花—梔子……………一三一

◎栗の花—合歡……………一三三

◎牡丹……………一三六

◎卯の花—橘……………一三九

◎紫陽花—葵—向日葵……………一四一

◎薔薇—夾竹桃……………一四三

◎撫子—常夏……………一四六

◎百合……………一四八

◎晝顔—夕顔……………一五一

◎菖蒲—杜若……………一五三
◎蓮—藻の花……………一五五
◎林檎—櫻實……………一五八
▲夏 雜……………一六〇
(三) 秋……………一六四
▲時 令……………
◎初秋……………一六五
◎秋の朝……………一六八
◎秋の夕—秋の夜……………一七一
◎暮秋—ゆく秋……………一七四
▲天 象……………
◎秋空—秋雲—秋晴……………一七七

◎天の川……………一八〇
◎秋風……………一八三
◎野分……………一八七
◎月……………一九〇
◎露……………一九四
◎霧……………一九六
◎秋雨……………一九八
▲地 儀……………
◎秋山—秋野……………二〇一
◎秋の水—秋の川—秋の海……………二〇四
▲人 事……………
◎七夕……………二〇七
◎魂祭……………二〇九

▲動物……………
◎雁……………二二二
◎蟲……………二二四
▲植 物……………
◎木犀—木槿—芙蓉……………二二九
◎紅葉……………二二二
◎萩—女郎花……………二二六
◎桔梗—芒……………二二八
◎菊……………二三一
◎秋の果……………二三四
▲秋 雜……………二三六
(四) 冬……………二四〇
▲時 令……………

◎初冬……………二四一
◎寒—冴—冷……………二四三
◎冬の日—小春……………二四六
◎冬の夜……………二四九
▲天 象……………
◎冬の空—冬の雲……………二五一
◎冬の月……………二五二
◎冬の雨—時雨……………二五四
◎木枯……………二五六
◎雪—霜—霰—霰……………二五九
▲地 儀……………
◎冬の野……………二六四
◎氷—氷柱……………二六五

◎千鳥	二六八	◎地	二八八
▲植物		◎日	二八九
◎山茶花—水仙	二七〇	◎星	二九一
◎かへり花	二七三	◎雨	二九三
◎落葉	二七四	◎風	二九五
▲人事		◎雲	二九七
◎クリスマス	二七七	◎煙	二九九
◎歳暮	二七九	◎時	三〇一
(五) 新年	二八二	◎草	三〇五
◎天	二八六	◎木	三〇七
第二編 無季		◎山	三〇九
		◎野	三一〇
		◎水	三一二

第三編 人事

◎鳥	三二四	◎淚	三四八
◎獸	三二七	◎笑	三五二
◎飲食	三一八	◎望	三五四
◎器具	三二一	◎夢	三五六
◎人	三二六	◎煩悶	三五九
◎身體	三三〇	◎憧憬	三六一
◎病	三三四	◎寂寥	三六二
◎生	三三七	◎信仰	三六六
◎死	三四〇	◎別離	三六八
◎悲	三四三	◎羈旅	三七一
◎喜	三四五	◎哀傷	三七四
		◎祝賀	三七六
		◎追憶	三七七

◎戀愛……………三七九

— 目次終 —

類語の扱ひ方

本辭典に收めてある類語の、幾分豊饒にして、新意に富んで居る事は、編者の聊か誇りとするところである。類語の多くには、解釋と用途とを附して、間接に一首を整へるに便ならしめてあるが、なほ一歩進めて、こゝには直接に之が運用の方法を説かふと思ふのである。

そこで先づ『四季』の部「春」の劈頭立春の中の類語を運用して、一首を整へる方法を説いて見よう。類語の三番目に、

「若やく春の」

と云ふ一語がある。これを採つて、これを中心

にして、試作しようと思ふのだ。

此一語の解釋と感と云ふやうなものは、下に附記してあるから、之が用ゐる方、表はし方は、各自のこゝろに依つて定まるのであるが、こゝに、其標準と云ふやうなものを示さうならば、先づ此語を二句に置いて、「若やく」と云ふ語から、三句「心より」を呼んで、つゞけて見るのである。

「若やく春の心より」

これで、二、三句は定まつた。

つゞいて起る聯想は、平凡だが、花と鳥のこゝ

類語の扱ひ方

類語の扱ひ方

とである。巧を弄すると厭味いやみになるから、率直に、あからさまに、

「花もさくらむ鳥も啼くらむ」

と、一氣に四、五句をついで見る。初句が定まれば、一首は出来あがる譯である。さて、その初句が、一寸つきにくい。

「冬去にて」

とつけて見るとする。しかし、これでは説明に過ぎて、無意味である。いろく考へた末、

二番目の類語に、

「春は來ぬ」

と云ふのが、眼についたので、早速

「年こゝろに」

と、案じ出した。一首、ともかく出来あがつた

ので、左に書き直して見る。

年こゝろに若やく春のこころより花も咲く
らむ鳥も啼くらむ

ごく普通で、おもしろみと云ふものもないが、斯ういふ風に續れば、何の苦もなく、類語を使ひこなすことが出来る。

更に別の運用法を説かう。それは、類語と類語とを結合して、一首を組み立てることだ、即ち、

「春は來ぬ」

を初句に、

「祈らまほしき」

を四句に、

「天つちの前め」

を五句に置くこととしたが、二句と三句とに適當の語が無い。

一語又一語、檢べて行つて、

「たゞ微笑みて」

を二句に、

「この思い」

を三句に置くこととした。

例に依つて、左に一首を書き直して見る。

春は來ぬたゞ微笑みてわがおもひ祈らまほしき天つちの前め

もとより十分とは行かぬ、ともかく出来上ることとは出来上つた。たゞ四句は、この場合、やゝダレ氣味である。「祈りてましを」と改めたら、引きしまつて可からう。

此方法に依つて、今一首こしらへて見ることにする。即ち、先づ

「蒼あはらのばづかに霞む」

を初、二句に置き、次に出て居る

「やまと國原」

を五句に置くことにする。三句と四句とが無い。そこで先づ三句に適當の語を挿入して見なければならぬ。

「日の色に」

と置いて、四句を

「春はなりけり」

と置くことにする。

例に依つて、左に出来あがつた一首を書き直して見る。

類語の扱ひ方

類語の扱ひ方

蒼。ぞ。ら。の。は。つ。か。に。霞。む。日。の。色。に。春。と。な。り。け。り。や。ま。と。國。原。

これは、比較的出来のよい作となつた。三句の「日の色」が、一首におつとりとゆかしい色彩を興へて、蒼古の感じに満つる大和の國の早春を裝うて居るかのやうだ。

たゞ類語と類語と結合して、一首を作りあげるといふよりは、この作のやうに、三、四の句を別に挿入して、類語をはたらかせると云ふ方は作者の手腕も見えて、作りばえがすると云ふものだ。此方法に準じて、今一首試作して見ることにする。初句、

「春來る」

と置く。これは類語の中には出て居らぬが、「春

四

は來ぬ」の説明の下に附記してあるから、準類語と見るべきものだ。それから、

「戦はむ世のたゝかひに」

へ「いで」を加へて「いで戦はむ世のたゝかひに」とし、四、五句に置く。二、三句を案出せねばならぬやうになつて來た。作者は今二十五歳の春を迎へて、實世間の營みに入らうとして其意氣を歌はうと云ふのだ。

そこで、二句を

「わが二十五の」

と置き、三句を

「春來る」

と、初句を重用して、青春の氣に満ちた心持を的確ならしめる。これで、一首が出来上つた。

左に書き直して見る。

春。來。る。わ。が。二。十。五。の。春。き。た。る。い。で。戦。は。む。世。の。た。ゝ。か。ひ。に。

句々に活氣が満ちて力のある作を得た。斯ういふ風に一、二句を挿入して、類語を引き立て、一首を組み立てるのは、作者のはたらきである。これが基礎になつて自分から自在に作歌し得るやうになるのだ。

斯ういふ調子で、春の部全體の各部門の類語を點檢し、それ／＼一首に組み立てる稽古をしでもらひたい。

次に『秋』の部の秋の夕、秋の夜の中の類語を點檢することにする。先づ「夕」から初める。

「夕鳥のこゑ」

と云ふのが、眼についた。この句から、

「遠く消えゆく」

と云ふ聯想の、句になつたものが、胸に浮んだ。何がなしに、四、五句が出来た。なほ、類語を見て行つて、ふと此場合に嬉しく感じたのは、「額たれて」

の一語である。この句から、

「ものをおもへば」

と云ふ七音の一句が口を衝いて出て來る。ついで起つて來る聯想は、「額たれてものを思」うて居る作者の場處に夕ぐれの氣が迫つて、小窓などのほの暗いさまである。そこで三句を

類語の扱ひ方

「ほのぐらう」

として、一首が出来上つた。極めて無雑作に出

来上つたのである。左に書き直して見る。
額たれてものをおもへばほのぐらう遠く
消えゆく夕鳥のこゑ

幽婉の作となつてあらはれた。だんく自在に
出来て来る。

今一首「夕」を試作して見る。類語の

「落日の黄なる光を」

と云ふ一語に、秋夕の景趣際やかに覺えて、こ
れを初、二句に置き、三句以下を考へて見る。
野原など歩いてるやうな心持になつて、
先づ三句を

「身に浴びて」

とし、四、五句を

「われは行くなり大野の中を」

と無雑作につけて見る。ともかく、一首には
なつたが、三句以下、説明に過ぎて、類語のお
もしろみを、著しく減殺したものと云はなけれ
ばならぬ。試みに五句「大野の中を」を、「大野
のぼてを」と改めて見る。僅々二音の相違で、
「ぼて」が初句の「落日」によく響く、景色の散
漫にならうとするのを、引き締めて、歌の面に
寂びが出て来た。斯く僅々二音の差で、一首の
價值が定まると云ふ場合が歌に多い。尤も注意
すべきことである。左に此作を書きまとめて見
る。
落○日○の○黄○なる○光○り○を○身○に○浴○び○て○わ○れ○は○行○

く○な○り○大○野○の○ぼ○て○を○

不十分ではあるが、類語の景趣の餘意を幾分あ
らはし得て居らう。

こんどは「夜」の方の類語を點検することに
する。先づ「眼についたのは、

「旅の夜のこと」

である。秋の夜の長く、さびしい心持を言ひあ
らはさなければならぬ。これを五句に置いて、
一首を組み立て、見る。

ふさはしい句をと、類語をしらべて見る。所
が、

「遠きより」

と云ふ語が見當つた。さしづめ、これを初句に
置く。二、三、四句は自分で案出して結びの好

句を活かさねばならぬ。

二句を

「冷たき鐘の」

三句を

「ひびき来て」

四句を

「孤獨にたへず」

と置いて見る。

「旅の夜のこと」に對し、「孤獨にたへず」は、
おのづから起るべき聯想で、少し説明的かも知
れぬが、「たへず」とあるので、さまでにも感じ
まい、たゞ二句「冷たき鐘」を捉へ來つたのは、
お誂へ向きで、五句に對して、情趣に乏しく、
一首の心持がシツクリ合はない。何とか改めな

ければ、結びの好句は死んで了ほう。
そこで、先づ缺點の中心となつて居る二句を
變へなければならぬ。

「人なつかしき」

と改め、三句を

「ひびきして」

と直して見る。しかし、そのひびきなるものは、
何より來つたのだからからぬ。一首の印象は、
爲に不明瞭に歸するのである。

「猿に似たる悲鳴して」

と改めて見る。旅の夜のやうな寂しきは、これ
に想ひ浮べられやう。もとより適切な感じでは
無いが、前の「冷たき鐘」のやうな、間に合せ
の、浮ッ調子のものよりは、よりました。

左に、一首に書きとめて見る。
遠きよりましらに似たる悲鳴して孤獨に
堪へず旅の夜のごと

今一首「夜」の分から試作して見よう。類語
をまらべると、

「ともし火の光り水なす」

と云ふのが氣に入つたので、これを初、二句に
して、一句を整へて見る。

秋の夜は、涼味、水の様である。「夜氣、水の
如し」など言ひ慣れて居るか、燈の光を水に喩
へたのは、聊か新意があらう。水なすは涼しい
心持もあるが、はつきりと冴えた光の形容であ
る。秋の燈は此一語に表明せられて居らう、そこ
で、三句以下を早速考へて見る。先づ案出され

るのは、三句、

「夜の室に」

であらう。四、五句は、

「人なし卓の花のあかるさ」

卓上に鉢植の花が置いてあると見ても、花瓶が
載せてあると見ても可い。その花があかるい燈
影に照り映えて居ると云ふのは、いかにも秋の
感じだ。左に一首を書きまとめる。

ともし火の光水なす夜の室に人なし卓の
花のあかるさ

これで可い。

次に『無季』及び『人事』の中から、ざつと
類語の運用を示すことにする。前に述べた所に
準じて、大體分つてゐることゝ想はれるから、

成るべく簡単に説明する。

『無季』の「地」に收められた類語の第一行を
見る。すると、「地震ふる」と云ふ語が、先づ眼
につく。二行目を見ると、「土舟」と云ふ語があ
る。何か兩者に關した處があるやうに思つて、
それから、一首を構成することを考へて見る。

土舟の如き地上にわれら住む

と前半を試作する。人間の住む世界を土舟に喩
へた觀方に注意すべきである。修辭を議する前
に、先づ此の觀方をよしとする。

今度は後半だ、四句に不安の事を言つて、「地
震ふる」に續ければならぬ。

危ふいかなやこの夜地震ふる

斯う据ゑて、一首を纏めて見る。

土舟の如き地上にわれら住む危ふいかな
や。夜地震ふる

率直に言ひ下して、作者の感じの濁つて居らぬのも可からう。

次に『人事』の一番終ひの「戀愛」の語彙二行目に、「思はれ思ふ日となりぬ」とあるのを取つて、一首の二句と三句とにする。之れは作者自身斯う云ふ感じのある時、眼についたとしなければ、文字を操つる遊戯に過ぎなくなる。すべて『人事』の類語を取つて歌にする時、作者は自己の感じて居る事と別な行き方をしてはならぬことを注意する。で、「思はれ思ふ日となりぬ」の初句と四、五句を自己の感じから考へて見る。思想がこんぐらかつて、語を成さぬと云

ふ場合、次の行を見ると、「見そなはせ神」と云ふ語があつた。之れを五句にして、四句を「われらの戀を」として、咄嗟の間に後半が纏つた。所で初句が難かしい、「清く清く」と置いて見る。餘り説明だ、「うつくしく」とすれば、幾分此の弊から脱し得られる。即ち、
うつくしく思はれ思ふ日となりぬわれらの戀を見そなはせ神

と纏めて見る。單純ではあるが、初心者のおまじりとして許すことを得やう。

總じて類語を類語として取扱はず、自己の感情を土臺にしてかゝることを忘れてはならぬ。

作歌新辭典

金子 薫園 著

第壹編 四季

寫生が一般藝術の基礎をなして居る如く、和歌研究の根柢となるべきものも、矢張り此の寫生に基づかねばならぬ。寫生の用務は、主として自然の景物を寫すにある。然うして、自然の景物が、四季折ふしの移り變りに、其面目を改めて行くのは、つまり寫生に變化を與へてくれるので、春夏秋冬、同じ事を繰り返してゐるやうでも、寫し方は年一年と、新しく且つ深くなつて來べきである。自分が寫生を以て、和歌入門者の重要な研究事項となし、その根柢をこれから造らしめる爲めに、本辭典第壹編として、先づ「四季」を置いた所以である。

(一) 春

○春が来た！このおとづれには、いかばかり人の心がそよられるであらう。久しい冬枯の色に對して荒みはてた我等の官能に新しく觸れるものは何であらう。空のけはひ、土の色、鳥のこゑ、水のひびき、見るもの、聞くものみな新ならざるはない。この新しい、若やいだ心持と春の自然と合體して、春の歌は次ぎ次ぎに出來てくるのである。

○春の日の氣分とも云ふものは、決して樂觀的のものばかりでは無い。明るい、艶やかな表面ばかりを觀て、裏面に流れてゐる寂し

とか悲しみとかを等閑に看過して、つては、淺い、軽いものになる。昔の歌には、斯うした軽い觀方のものが多かつたやうに思ふ。尤も、落花に對して、寂しみを覺えた云ふやうな作は多いが、それは佛敎の無常觀などから來てゐるものと、因襲的に其の思想を敷衍したのに過ぎないと、此の二つに分たれると思ふ。春の日の明るい華やかな裏面に、悲しみや寂しみのあるのを凝と視て、それを歌ふと云ふ、自然の風物に對し、行き届いた細かな注意力があつて欲しい。我々は落花から、悲哀を感じないで、寧ろ一種の軽い旋律を覺える。新を衒ひ奇を競ふのは好ましくないが、自己の感じを閑却してはならぬ。

時令

◎立 春

柔らかい、しなやかな情緒が春の景物のすべてに絡つて居る。それをまとめて大らかに長閑に感ぜしめるものは、此の編の中に流れてゐる色と匂ひとである。

語彙

○春は來ぬ 春が來たといふ意、「來ぬ」の「ぬ」は半過去である、無論春が來てから間もない程だ。「春來る」といふと、現に來たのであるが「來ぬ」といふと少しそこに間がある。「來る」は突如として來た心持があるが、「來ぬ」の方は、落ちついて來たといふ感じが現はれて居る。「來る」と「來ぬ」とには、この差違がある。○春立ちて 春の季節に○春こゝに 來ぬとか、來る ○若やぐ 春の 若やぐは若々しくなること、冬の寒なつたこと ○春こゝに とか、つゞける ○若やぐ 春の 硬い感じに對して温かい柔かい心持を持 ○春の心を 春を人になぞらへて心のある ○歸り來し 春の情に 去つた春がまた歸り來つたこと を例の擬人して「情 ○この思 作者の ○たゞ微笑みて 何となく心が和らい に」と言つたのだ ○二人ゆる 自分と戀人が何 ○祈らまほしき 祈りたい何々とつゞく所。人と吾との行く末を幸多かと言つたのだ ○祈らまほしき 祈りたい何々とつゞく所。人と吾との行く末を幸多

が心君が心と溶け合つて、一つ心になるやうだ。○我は男の子ぞ。○常少女われ常少女はいつも若々しい少女といふこと。○生命ともがなう。うしたいと願ふ意だ。○老いほけし春の日に對するとこの感がある。

冬の翁初春といふ若人の前に。○都大路に都の大道をいふ。春は都と密接した關係がある。しめ。○天つちの前天地に對する時である。○野路ゆけば。○わが心わが家わが國小さいものからだんだん大ききなものに。○高山の上。○大海の。○遠空よりか遠い空から何。○蒼ざらのはづか及ぼした。

○高か山やまの上。○大たか海うみの。○遠とほ空そらよりか遠い空から何。○蒼あせざらのはづかにかすむ。はづかには、ホンの少しばか。○やまと國原くにはら大和の國を廣く觀たのだ。大和は奈良の舊都のある國、懷古の感が多い。○光は満ちて。春の光りが満ちたのだ。○戦はむ世のたゝかひに。人生を一種の戦。○力あり。○老いじ若かれ。老いまい若くあれの意。○いかに思ふや初戀人はつこひびとよ。初春と初戀とは聯關する所がある。○わが春の女神めがみ大神おほがみ春を司る神を女神と觀たのだ。○神も見よ。ふたりの戀をいとか何と。○

我こゝにあり。○あこがれの國は東。わが思ひこがれて居る國は東方の意だ。○わが世の春は黒髪の中にもわが黒髪の艶やかに美しくい中こに春がこ。

天地に對して、希望の光をかけた。作。初春のたのみ心があらはれて居る。

「むかしの里」は昔住んで思出のある里。鳥聲、懐かしいほのかな思出を呼ぶ。

四、五句の率直に言つた處がよい。初二句の言廻しも妙だ。

すらすらと詠み下した處にこの作のゆか

春立ちぬやがては花もにはふべしと思をつなぐ天地の前

春立てばその名も人も忘れはてしむかしの里の鳥の音のする

空は空の色に霞みて春きたる君よ手とりていつはらで

何ならぬ物のひいきも興ひきてゆかしき春の地となり

窪田 空穂

水野 葉舟

前田 夕暮

しきがある。

新たなる自然から得た或る慰藉をあらはしたものの。

にけり

尾上 柴舟

初春の空に一すぢわが若さささるる如くうちかすむかな
金子 薰園

◎春の曙—春の朝

語彙

○ほのぼのと ぼうつとの意、夜はほのぼのと明けてゆくに似たといへば、春の夜のぼうつと明けゆくさまが見える、この語は春の夜明けに適切である

○薄紅に薄紫に 薄紅はあけがたの雲の色、薄紫は色彩美に富んで居る。春のあけ方の雲の色は、色彩美に富んで居る。綺麗だ。○夜は明けむとす 夜の

やうとする ○東明するや 東があかるくなつて 夜が明けかゝる時 ○空ありあけぬ 月がありながら 夜が明けたこと ○曙の時をいふ

色 ○かゝる曙 ○片空に 東の空が明るくなつても、片空に 日影はや霞の中に 日の光り霞の中はぼうつと見えぬ

○白み初めつ 夜の暗い空の色が白くあ 遠山の ○わたつみ見れ

ば春の海を 潮の香さへ新なる 潮の匂ひまでが新しい春ら ○山櫻扉の 山櫻が立つて見ればだ

として居る ○鐘の音に ○花の上にあり 残月などが花の上に淡く懸つ ○百千の鳥の囀りを云ふ

りに いるく鳥が ○頬に照るや 花の色が白い頬に ○夢もなかりき 心のどかで、夢啼きかほすこと 照りはえること

明かし ○君をえて 戀人を得 たのだ ○こゝにい 年 ○思ふこともなし ○目ざと き人

と目を覺ましや ○寝みだれ髪も 村住の 村居の心やすきは、寢亂髪と云つて寝て起きたとすい人とだ

ふ場合 ○釣瓶の音の ○垣隣 垣一重へ ○山に寝て ○艤せよ 舟を出す ○白帆あ

げまし ○木雪の 木のしづ

「さみしらは」は「さびしげし、四十路女のさびしげな面と、泪美藍の花の對照が好

四十路びと面さみしらに歩みよる二月の朝の泪美藍の花
北原 白秋

三句が一首の情緒をよく表はして居る。

二、三句の間に「言葉の」を入れて見る。軽い爽やかな作。

「ほのぼの」及び「山櫻扉」の解は別項用語の中にある。

いかならむ夢みてありや半眼に君は睡れり春のあけぼの
前田 夕暮

わが背子がこゝちよげなる尾につきて二こと三こといふ春の朝
與謝野 晶子

ほのぼのと山櫻扉のありあけに雉子なくこゑす尾より
金 于 薫 園

◎春日—春晝—遅日

語彙 ○春の日 春季中のいつの日にても廣く云ふ場合と、春の日の光を云ふ ○春日 前と同じ意味だ。句を整へる場合、文 ○永き日 春の日の ○日の永さ 日の永 ○春の日 永

の○暮れ遅き暮れさうで○遅々として○春のひと日 春の或る一日といふ義 ○ながながし

ひと日の春の日の永い／＼春 ○暮ると忘れし 暮れるのを忘れたのであらうかと、疑問に言ふ所だ 前後の句に依つて、○

日は春の○こし方も過ぎて来た ○いまのこの身の○神の代のこと 非常に静か

うツとした日のさま ○おほ寺に 大きな寺のこと。大寺と悠 ○悔もなし ○思ひ出では

や思ひ出でようと ○古りし都へ 京都とか奈良の ○牧場の晝の ○故郷小野を ふるさ

野だ ○誰を戀ふるや ○心なぐさ いふに同じ ○心ゆかし 心にゆかしい ○ゆくは誰

が子ぞ 著飾つて春の日の街を行 ○そいろ心出来ごころ。ふ ○衣えらみ 出遊の際、どの

かつかと選 ○忘れ形見 忘れがたい記 ○老いやゆくらし ○かなた市路の遠ひ

き 山の手の静かな町などに住んで、下 ○古書いぢり 無聊に古書を引き出してく ○片だ

よりゆるる返事がないからだ
 ○波見てあれば○ものいはぬ人○春衣春著る衣服のこ○怨晴著である
 じてありぬうらめしく思つて居ること ○麗うらかに春の日の色の形容 ○のどかにひと日○暮れやらす
「寄りもせず」が却つて長閑さを思はしめる。
 春白晝はるまひるこの港に寄りもせず岬を過ぎてゆく船のあり

「杳として」は遙かにぼろろとして居ること、しつとりとして、自然の感じがあらはれて居る。

「圓山」は京都の圓山公園。だらしのない娼婦が見える。

春のおほやうな長閑な心持が出て居る。

若山 牧水

前田 夕暮

吉井 勇

杳として春の日照れりわれ知らずひとみづかにうるほひて來ぬ
 圓山まるやまの長椅子に凭りてあはれにも娼婦しやうふのあそぶ春の夕ぐれ
 春の日や大わだつみの眺めしてころろは和なぎぬ君が腕かひな

「わがはしたは」は「わが下婢」の意。垢抜けたのした作。
 今更のやうに感じて出來た作。

◎春の夕

に 平野 萬里
 わがはした梯子の段のなかばより缺おとせし春の晝かな
 な 與謝野 晶子
 ゆたかなる春の光りの照るところ生れし地つちのひろきを
 おもふ 金子 薫園

語彙

○春のゆふべの○春の夕暮○春のたそがれ「たそがれ」は、誰彼の差別がつかぬ頃で、もう薄暗い時分
 を云ふ。日が入つたばかりで、邊りがまだ明るい夕暮との間には時間の差があるのだ ○春の日くれぬこの一句には春の永い日が暮
が出て ○ゆふ暮時ぐれどきを夕暮の時刻をいふ。時間の都合で ○ゆふ春の鐘春の夕鐘といふの
居る 又たそがれ時といふことも出来る ○ゆふ春の鐘春の夕鐘といふのを轉換して言つた

青銅の壺には、作者獨特の感味が出て居る。

「具されし」は伴はれし、「夕座」は夕がたの法座の意。

柔かな春の夕の感じを出さうとしたもの。

かけひより青銅の壺に水おつる音をおもひぬ春の夕ぐれ
與謝野晶子

待つといはい母に具されし大寺の春の夕座もすべりいでまし
與謝野 寛

おぼろなる君が背後の描きかけの繪絹の杵の春の夕ぐれ
金子 薫園

◎春の夜―春の宵―春の灯

語彙

○春の夜 春の夜の全體を云ふ

○春の宵 宵の口のこと、十時前

○夜の春、宵の春 春の夜

の宵といふに同じだ。俳句の一慣用語で、歌に使はれ出したのは、まだ日が浅い

○春の夜街の 春の夜の町だ、燈が華やかに、行く人の衣の香り肉の香りが

なまめかしい ○春の灯に ○春の 燭 前の「灯」も、この「燭」も、同じともしたが、この方が

おぼろ夜 月があつて、ぼんやり霞んだ ○夜のおぼろ ○また宵ながら まだ宵の口で

○おぼろくの夜となりて ○夜まつりや ○灯かげ霞めり ともし火の光もボン

○春の夜の人 春の夜にふさはしい趣の人と云ふ意と單に ○夢みてましを 夢見ようも

○この夜もすがら ○薄もやの ○露店多き片側街を 露店は大道店のこと、片側街

○泣かせて泣かむ 人に泣かせて自ら ○盃の數 ○名も知らぬ君にはあれど ○

わりなし わりなしは、ことわりなしの意、「わり」 ○笑み泣き 嬉し泣きといふのと笑つたり

があ ○油をへすや 油をささないかといふ意。夜ふ ○化粧まさり 化粧して美しく ○肱枕

きて 肱を枕に ○衣疊む手元の ○晝に見しものゝ姿の ○春の夜なれば ○更け

ゆくもよし春の夜は更けてゆくのも一種
 〇忍びぐるま 戀などの爲めに 人目をよけた車
 〇仇ごころ
 〇戀心 〇想はれて人に想はれて
 〇人呼ぶこゑ 〇夜泣きする子に
 〇湯がへりの
 〇前ゆく人のうしろ姿を
 〇まばゆかりさと
 〇君おもひ寝む
 〇君の事を思つて寝ようといふ
 〇待ちてあらずや待つてやし
 〇うす曇る空の遠方
 〇思ふはその夜
 〇春の夜なりき

「さどめくは陽氣な
 聲で語つて居るこ
 と。内外の對照に淋
 しさを覚えしめる。」

情景よるしきを得た
 作だ。

おもふことありとしもなき春の夜を驚よいづくへ音を
 たてわたる
 前田 夕暮
 わが涙そゞぎし家に知らぬ人住みてさゞめく春の夜來
 れば
 窪田 空穂

静かな、そして鋭敏
 な神經のふるへてゐ
 るのを思はしめる。

「なごむはしづまる
 こと。潮さすは海
 水のそゞぎ入るこ
 と。」

「ものゝけは妖怪、
 家。廢家は荒れはてた
 家。」

「鬢うらはは鬢のうら
 がは、なげ襟はな
 げ襟にきものを著て
 ゐるさま。これはモ
 デルがある、阿々。」

「遊蝶花は三色菫の
 こと、英語のパンシ

いと淡きインクのはひ春の夜の眼にやはらかう沁み
 來るかな
 武山 英子
 街の聲うしろに和むわれらいま潮さす河の春の夜に見
 る
 若山 牧水

ものゝけも櫻をかざすおぼろ夜と京の廢家をよぎりて
 いひぬ (岡崎にて)
 與謝野 寛

鬢うらの白髮氣にする若叔母のなげ襟をかきさらぎ
 の宵
 金子 薫園

遊蝶花母に引かれて春の夜の花市に見し灯こそおぼゆ

「だ。」「花市は花を
賣る市。」

れ

同

●暮春—ゆく春

語彙

○暮る、春○ゆく春○暮れゆく春○春暮る、日○春ゆく夕○暮の
 春 俳句に用ゐられて居る詞、春の暮に同じ。○春の別れ ○春の行方 ○春去なむとす ○三月盡陰曆三月の日はての日 ○春や昔の伊勢物語の「月やあらぬ春や昔の春ならぬ云々」から出典して居る ○風力なし 暮春のあはれさが身に沁むものが
 ある ○仰がる、雲 ○うた、ねさめし ○みだれご、ち ○もの狂ひ ○琴柱え
 うなし ○墨うすき文 ○衣た、む時 ○ひと二人 ○出舟を待ちぬ ○雨となる
 へき ○夜ごろの空の月の暈 ○汐けの風汐氣をふ ○東をおもふ ○戀しき人を
 ○歌に拙き ○玻璃の盃むらさきの酒 むらさきの酒は葡萄酒のこと ○内海船の船酔を 内海船は内海

く船 ○街ゆけばおぼめく灯ともし店の灯かげのホウ ○もの皆の ○戀はる、如し ○な
 べて 懶き ○君は死にさわれも死にさと 心細いはては斯うも強く感じられるのだ ○海見てありぬ
 ○すねてもみたき ○ゆふ窓に ○若尼の ○わが家は母と妹 ○家鳩病める ○
 花は根に 花散つて根にかへること ○あるゆふべ ○門を出づれば ○雲さりげなし 「さりげ
さういふ様子がないこと。

つくぐと美しくし
 さびしさを覚えしめ
 る。春はゆき涙は来
 るといふ言ひ方がお
 ろしるい。
 率直に言ひ下した處
 がよい。

春はゆき涙はきたるちる花の月にましろきその大路よ

尾上 柴舟

なげうちし幾萬のこがね惜しからず惜しきは春の別れ

佐々木 信綱

なりよ君

「思ふに老いつ」の一
句、暮春の力なきが
言ひ盡されて居る。

何事か切りに期待さ
れた一日がくれて、
やはり淋しく一人寢
るといふのだ。

二、三句は、心が眩く
やうな心地だといふ
こと、静かなそれで
ゐて華やかな心持
ものがなしい心持を
語らうとして居る。

なまじ物さびしさに
堪へないといふさま

とこしへに稚^{をまな}かるべき君としも思ふに老いつ春また暮
るゝ
窪田 空穂

よろこびに一日は何をまらにしやつかれて春の夜をひ
とり寐る
内藤 長露

眼とづればこゝろしづかに音をたてぬ雲遠見ゆるゆく
春のまど
若山 牧水

はるのくれふとこしかけしふるベンチはげたるあとを
つくづくと見る
土岐 哀果

人すてし後の思ひをいとせちに知らまほしさや行く春

が表はれてゐる。

「衰へこゝろ」はゆつ
たりした春の心がが
ツカリ落ちてさびし
いこと

人 事

◎春 興

人事と言つても、その背景には自然がつきまとうてゐる。
すべての春の心は皆自然から生れる。春の光の中に何の
ももつゝまれる。

の宵

前田 夕暮

春今しゆくてふ暮^くの日の色に涙さしぐむおとろへごこ
ろ
金子 薫園

語彙

○この春の興この春のたのしみ ○摘草つみくさ ○踏青たうせい わか草を踏むこと。「踏青や」と初句に置

○青きを踏みて上解同 ○潮干狩潮がひき去つたあとの干潟をあさつて、貝などを拾ふこ

○里あそび山あそび ○心うらゝ心も春の日のうらゝか ○片山かたやまをはた小流を

片山を越え小流を渉るとい ○御手とれば ○乳母もまじりて ○君が家へ來ぬ 菫を
 ふべきを略されてあるのたい ○初めて歌も 詠まうといふ心持になつた ○弓ひけばはづ
 蒲公英を摘みなどして長い野路もいづの ○あこがれ心 ついた ○もの足らぬかな ○
 都人 都人の花の名を知らぬ ○初めて歌も 詠まうといふ心持になつた ○弓ひけばはづ
 かに汗の汗が少し背に ○駒並めて行く 公子、駒を並べて櫻 ○小草履の紅きはな
 緒を 小草履といひ、紅きといひ艶味 ○たゞ春の草野も山も、たゞ一面に春の草ならぬは
 華草の赤い、菫の紫な蒲公英の黄な ○うつらうに 酒など酔つたやうにうとくして
 花などが點綴されて、見事なこと ○うれしきは白紙のべて 歌をかく時とか何ん ○やゝ寒き濱の春かせ
 來るこゝろ ○うれしきは白紙のべて 歌をかく時とか何ん ○やゝ寒き濱の春かせ
 るをいふ ○かの鳥の白き翼に かの鳥は鷗 ○蟹の少女の日黒みを 漁りするわかい女の顔がく
 るをいふ ○かの鳥の白き翼に かの鳥は鷗 ○蟹の少女の日黒みを 漁りするわかい女の顔がく

るこ ○網引の網もととりてみつ 網びきは曳き網のこと。網を曳く漁夫 ○みな湖へ ○
 群にはなれて ○はらひやる衣のほこり ○夜がたり 夜話に今日の一日の樂し
 場合用ゐる ○この日和 ○春ぐもり 花ぐもりとも云ふ。花のさくころは ○草の汁 草の葉を
 のこと。雅味 ○花氈敷く 蓮華草の花が咲き満ちてゐる野を見た時 ○衣に陽炎 衣に陽
 のあるものだ ○花氈敷く 赤い毛氈が敷いたやうに見えるのを云ふ ○衣に陽炎 炎がち
 すらく ○四方の山もと 山もとは山の ○割籠ひらく 辨當をあけること ○君摘めばわれ持ち
 するを ○さゞめき歸る 陽氣に談りあつて歸るのだ ○晝霞せり 晝の霞がこめて居ると。晝の霞は朝
 そへて ○さゞめき歸る 陽氣に談りあつて歸るのだ ○晝霞せり 晝の霞がこめて居ると。晝の霞は朝
 して居る。趣味
 のあるものだ。
 「鳥なまめきて」云々
 は春らしい艶のある
 聲に啼くこと。春興
 といつてもごく淡

たまたまに鳥なまめきて 臆に啼く春を淺しとわがかこ
 つ日を 籬田 空 穂

四、五句は、おどけたのた。興じたさまが見える。

「東女」は關東の女。はれなくした春の日のけしき。

「山ぶみ」は、山あそび、「茅花ぬかまし」は、茅花を抜かうの意。

春の夜を興じいでたる人の子は狐に似たり人の子をとる

平野萬里

東女にまじりて春の花つむ日下野富士に雲なかりけり

岡 稻 星

針とめて去年とや今日の山ぶみを語らむ妹に茅花ぬかまし

金子 蕭 園

雛 祭

語彙

○初雛の 初めて飾る雛人形 ○雛まつり 桃の節句といふ。三月三日がその日だ ○男雛女雛 ○雛の殿所 内裏様と稱す ○内裏雛 内裏をつくりて飾りつける雛人形のこと。紙雛に對し 今日飾りつける雛はこの内裏雛だ ○紙雛 紙でこる男雛のこと

た雛のこと。人形の出来ない、ごく古い時代のもの、一見した所粗末なものであるが、そこに巧を弄さない自然の趣が出て居って中々雅味がある ○五人囃子 雛に屬

人のこと。笛をふく者、大鼓うち小鼓うつ者、太鼓たたく者、扇を持つて謠ふ者以上五人 ○菱餅の白と草いろ 白と草色の菱餅のこと。菱餅は雛に供へる菱形に切つた ○あたゝかき白酒の香 白酒も雛にさし上げる品の一つだ。五人囃子が上のお餅をいふ

緋桃しら桃 桃の節句と言はれる位で、桃は雛につきものである。花の紅きが雛の殿のましろはなかも ○花氈の上に ○紙燭の灯 焼松のさきを焦して油を塗り、それへ火をともし、これが紙燭だ ○よろこびは叔母を泊めたる 子供心が見えやう ○小さき夢 幼い雛の主の夢 ○雛も眠りぬ 雛の主

ば、本尊の雛様 ○陸言に 雛が睦ましく語りあふ意。實際語る ○京雛は 京都製の雛のこと、も眠つたのだ、譯はないが、さう思はれるのである ○京雛は 京都と雛とは、連絡があるやう ○雛の君のことだ ○古雛に 古い、時代のたつた雛のこと古 ○雛の主 雛

飾る幼い女の兒をし ○わが世小さき繪屏風に 雛様の後を圍ふ繪のかいてあゝ小さき屏やれて言つたのだ

びだから、斯う雅いさうと ○妹なれば ○賣るも惜し ○形見となりぬ飾り主がなくなつて雛がその形見となつたといふ

のだ。哀あはれ ○乳母と飾るを常として居つたが、その乳母世を去つてなしたといふ意味が續かう ○小さき兄の室へやの隅かたに雛なつたといふやうな意味が前後にかよつて居らう。いくら質素でも雛を祭るといふことに變りはない。否却つてその方が趣があるかも知らぬ ○前髪まへがみありし ○肩かた上あしあとの肩あし上を取つた ○盃はそのまゝ姉へ盃へ白酒をくんでもらつたが自分は飲めないからい載かく真似まねをして姉へ廻まわしたといふ意

○緋ひの袴はかま 官女くわんぬのほく袴はかまで緋ひの燃えるやうな色をして居るもの。白い衣の色、黒い下げ髪かみの色、好よい色彩しきの配合くわいをなして居る。これが長柄ながえの銚子さしから白酒しやくをついですゝめるなどほう

○幼こき戀こひの ○初はつ戀こひなりき ○この三日みかのおもひにも似にてこの三日は三月三日である

○幸さいちあらむ君きみが世よ 雛ひなの前まへでこの雛ひな様のやうに美うしく幸さいちある戀こひを得えむ ○今いまをかへり

み ○まなざしは眼まなこつき ○ほゝるめば ○片かた頬ほのさまの ○片かた笑えみもよし片頬に笑

るのも ○母上ははあしのこゝに嫁よめぎしこゝる持つて來られた雛と云ふことが下へ續くところだ ○昔心むかしこころの ○少女せうにょさびらし

いやうす
をいふ。

「大御油おほみあぶらは油あぶらを尊たんだのた。燈あかり影かげ、桃ももをてらし雛ひなの殿とのを照てらす。果然しかたなく、桃ももの花はな、火ひの眩くらさにちる。

雛ひなが火災かさいに罹あつて五人ごにんが残りつてゐるの一人ひとりが、災わざいにあつて内裏うちらから逃にげれてきたものゝやうに觀みて、それそれに白しろ酒しやくをすゝめて健康けんこうを祝いわすといふさびしい雛ひな祭まつりだ。

おほみあぶらひな
大御油雛の殿にまゐらするわがまへがみに桃の花ち
る
興謝野晶子

えんじやうだいり
炎上の内裏のがれし伶人に白酒まゐる雛まつりかな
金子 薫 園

天象

時令に於いて、春の感味を総合的に味はつてから、此の天象に移ると、部分的になつてくる。特殊の部分描寫を要する。

◎春雪—殘雪—雪解

語彙

○春の雪 ○春のあわ雪 沫のやうに溶け易いので此名がある ○淡雪、薄雪 居る雪をいふ。沫雪と淡雪と音が同じなので混同しすやいが、前者は降りつゝあるもの、後者は降りつもつて居るものと云ふ區別がある。沫はあわ、淡はあはで假名も既に違へて居る ○殘んの雪 残りの雪といふに同じ。溶け ○うす雪のして 一二寸雪が降りつもつて居るさまをいふ ○ちらく粉雪 粉のやうな雪がちらちら降つてある場合 ○雪解川 雪が解けて水の増す川、溶々して流れるさ ○春あさし 早春ふに同じ。春が立つてか ○さすがに春のけしきばかりを けしきばかりは、わづかばかりの意 ○晴れゆく空のうす霞 ○春ともわかず ○風は寒からず ○日かげ日なたの 日のかけ

處は雪が残つて日なたは溶けてしまつてあるといふ場合だ ○ふるや溶けつゝ ○ありなし風 あるかなきかの風をいふ ○花や降る 雪を花に喩へたのだ ○兎つくれば 雪で兎をこしらへると ○いさゝかのおもひの 春思すこ ○あともなし 降つたあともなく解 ○きさらぎ半 二月の中頃をいふ。意氣な感じがする頃だ ○いつか流れて ○笹の葉のさやぎ 笹の葉が、がさ／＼鳴るこ ○山松のむらさきの幹 雪が少 したまつて居つてそこへ春の日がけ 雪中少し風あるさまだ ○挽きすてし門の車の ○白粥の白 白い粥のやむるやうにさしてあるなど美しくい ○切株 切株に少し雪がたまつて居ると、うす雪を形容したのだ。白粥と ○切株ほのかに白 切株に少し雪がたまつて居ると、うす雪を形容したのだ。白粥と ○濡れもあへず ○出でゝ見たまへ ○思ひがけきや 思つても見ない事であ ○初戀のごと 春の雪を斯う観たので、うひうひしく純な處が似、居らう ○今日のみの幸 ○愁は消えず 雪はきえても胸にむすぼ れて居る物思 ○解けそめて幾日の雪の 解け出して幾日にかなるのに、廂の陰や ○木は消えない

三、四句は、君がなきがらを焼いた烟の意。春風を悲観した

この野哀しこの春風よなきがらの君の煙も香にまじる
かや
土岐 哀果

霞

語彙

○朝がすみ ○晝霞 ○ゆふ霞 ○霞む日 ○うす霞 ○うすく濃く ○たつ霞 ○今日も霞めり ○霞みて遠し 霞んで遠く見えること。ぼうとは鐘かすむ霞たなは鐘の音も籠つて居るやうに聞える ○流るゝいろの流るゝやうなさまをいふ ○かすみくれゆく居るまで暮れて ○かすみに明けて 霞んであるまゝに夜があけて ○波間より ○舟はやも霞の中にが早くも霞の中に隠れ ○橋二つ長きみじかき 長い橋と短かい橋と二つ渡つてとていふやうな場合だ ○湖は湯元のあたり 湖は中禪寺湖だ ○水の光れる 春の日が水に射 ○空のいづこ ○第一の第二の札

所 一番目二番目の札所の義。西國三十
三所の観音堂を第一第二と算へた
それが霞に遠々しくなつたといふやうな時 ○瓜さきあがり だんぐり上り路になること ○松のみの山 ○みな夢に似

て ○蚕が家は ○むらさきの石なせる貝 紫の石のやうな貝といふ義。新しい綺麗な居る ○牧野の遠 牧場になつてある野の遠くは海に續いて居つて白色だ ○帆の泣んであるのが見えるといふ風に観ても可い ○羊よぶ ○日は暮れぬ ○二すぢのレールの末は 雷は軌道、汽車のはしる路、その末が霞んであるやうな時 ○思はぬかたの鐘の音に ○その日遙けし 昔の日をおもふと遠い ○ひたひた寄する潮の香をひたひたは、ピタピタだ ○春が見る白日の夢や 春を人に喩へて晝の悠長なさまをいふ。
「朝戸出や」は、朝戸をあげて出ること。「離宮まねびし」は、奇警な著眼だ。

朝戸出や 離宮まねびし 家主と隣り住むなる春がすみか
な
典謝野晶子

春を擬人的に觀たもの。
一寢入してさめた時、こめた霞の中に遠く鳥が音をきいた、それが世界の外で啼いてゐるやうなほのかな感じがしたといふのだ。

あどけなう霞はひくよ鳥啼くよ春は幼稚のまたの名にして
尾上 柴舟
草に寝てさむれば遠き鳥が音の世界の外のかすみの中に
金子 薰園

陽炎

語彙

○陽炎 かげろう 立ち上る氣をいふ。まぶしい陽氣なものだ。○絲遊 いとゆう 陽炎の一名、絲の遊んでるやうに見えるので此名があ。○立つや陽炎 ○陽炎さえて ○朝陽炎 あさひかり 朝立つかげ ○夕陽炎 ゆふひかり 夕方立つ ○眞晝 まひる かげろうふ 晝立つ ○ゆらゆらに燃ゆる ゆらゆら 燃える義 ○夢の如 ごと かりとめもない ○日の入るころを ひのいり 日没のころに陽炎が一しき しき 燃えたり見えたり燃えるといふやうな時 ○朝しばし ○見えみ見えすみ すみ 見えたり見えなかつたり ○風

ありやなし ○ひと構布 かまへ をさらせる 染物屋を云ふ。其の晒した布に陽炎が燃えてゐるやうな趣 ○やゝ乾く ○眞砂路の ○磯山につくばひて見る つくばひては ○昨夜の簀干 すせ 干す 昨夜ぬらした簀干を干してゐる垣など へ陽炎がちらく してゐると云ふ時 ○垣根垣穂 かきほ の 垣根は垣のもと、垣穂は垣の末のこと ○筵 むしろ ならべて ○轍 わだち のあとの薄 うす じめり 車の輪のついてゐる路に雨が ○わが門田 かどだ 田 わが門の田の義 ○ふる草 くさ 鞋 ○かへりみすれば 振りかへつ 見れば ○陶器 すゐもの つくる土のいろ その色にも春らしい ○川 かは 原ひろびろ 河ふちの、水のなが、砂利の多いこと ○月のぼる時 ○ゆらるゝ思 陽炎のゆ らく 立ち上つてゐるのを見て、自分の身も ○おもかげに來 こ む 髣髴として目前に人の見 けた感想だ ○たちわかれ我は南へ ○寂 さび しさに居て ○たゞひと時の ○拾 ひろ む來 こ し貝のかずかず ○まぼろしの人 朦朧として判然せぬ人の姿。切に人を思ふ ○陽炎

もせず○曇り日は偶然上を承けて居るやうになつた○小野の緑に小野の若草と○廣き明地の草の上に出で居るさまが見えやう。野中でもなく庭でもない明地に一種の趣があらう○山畑の山中の○黒々と干潟ぞ遠き汐の干たあとが遠く○さし潮に潮がさして来る○夢に似てで居るさま○うつら眺めぬ恍惚として見て居るといふのだ

大地はしづ心なし
は、大なる地の心の
落ちつかぬこと、上
句いかにいそがし
さう。

温情玉のやうな作、
い、遊ばずと、
子供らしく言つた所
に、天真が流露され
て居る。「春さりて」
は春來りての意。
「何か欲りする」は何
を求むるのであらう

水わきの陽炎たちぬ草もえぬいま大地はまづこゝろな
し
君病めば出で、遊ばず春さりて川にかげろふもゆると
いふ日
尾上 柴舟
平野 萬里

かといふ意。何といふこともない。憧がれ心地を詠じたもの。

けり

金子 蕭園

春 雨

詔景

○春雨○春の雨春雨と春の雨とに強ひて區別をつければ、前者は柔かに聞え、後準じて二者の適不適を考へればならぬ○春のあさ雨春の朝○春の夕小雨春の夕方にふる○花にふる雨○春雨傘春雨のふる時さす傘をシヤレて言つ○そぼふるふること○しとしとしとしと○濡れてみむ○ふりそめし日を○そぼふり暮らす○たいしめやかにひつそ○籬の外は○さしかけ傘の自分の外に一人あつてさしかける傘をいふ。あひく傘といふと、ヤハ○生簀生簀は魚をいけの魚のおくとこるだ○霽れがたのもの霽れた朝など空むらさきに見えて美くしい○ひとり寝し○波止場のゆふべ○港

の宿に○雫ぬぐへば○渡舟小屋○寺町の寺がかたまつてある町のと○橋いくつ越えて○
 簀がしてまし雨が降つて来たので、簀を貸しませうといふのだ○戀ものがたり春の雨夜など尤もふさはしい○夢がたり
 なし○君と倚る戸の○鐘おほき夕○花と花との○ひとしきり明るむ空
 に雨が一寸の間やんで、空が明るくなるも。しかしすぐまた暗くなつて雨降り出して来たといふやうなことが後句に含まれてある○君は今○待ちし
 夜の○きぬぎぬや男女が會つた夜のあくる朝○名なしぐさ名なきがまゝに○琴爪の袋爪
は琴を弾く時に指のさきにはめるもの、その袋だ○鶯の忍び歩きを鶯を人に喩へたのだ。興○やれし笥の○
 干潟についぐうす濁り水小鰻でも居り○さとし白き障子の中は○紅賣の少女
 姿に紅を賣る少女の○掛け鏡べに紐せしを掛け鏡に紅い紐のついで居るさまをいふ○憎みもえせず憎み
 ない○君を思へり

「赤き目」は赤い臆のシンボルであらう。
 雨の日の孤愁に堪へぬ心持がうなづかれる。その日さへ「さへ」がよく利いて居る。
 例の眞率な言ひ方に、情の自然を得て居る。君に流るゝかたしへない温かみを覺えしめる。「得度の日」は佛道に入る日のこと。「鐘」

しつとりとした手ざはり。

三越みつこしの赤き目ぞ泣く石屋根に春雨ふれば旗ぬれて立つ
とりいだす書棚の本の手ざはりのその革表紙春の雨がふる
 土岐哀果
 春の雨君とあゆみしその日さへ寂しかりけるわれなるもの
 相馬御風
 春の雨ふれる宵なりあたゝかう君にながるゝわが涙かな
 平野萬里
 春のあめ高野の山におん兒おんこの得度とくどの日かや鐘おほく鳴

おほく鳴るは、よく一首の詩情に響いて居る。
「なちこち人」は遠き近き知人。「氣づかふ」は掛念する意。

春寒しをちこち人^{びと}やわが病むを氣づかふらしき朝雨の
ふる
與謝野 晶子
金子 薫 園

◎春月—朧月

語彙

◎春月 ○春の月 ○おぼろ月^{ぼろつ}として冴えな
い月。春特有の月色 ○朧月夜 ○春の夜の月
○春やおぼろの^{月影にとか何んと}かつどくところ ○櫻月夜^{櫻のさく時}
分の月夜 ○おぼろの月夜^{おぼろ月夜}をいふに同
じ。の一音を加へて七音とし結句に置く例だ ○月朧なる ○春の月夜となりぬ ○君へゆく月夜の路に
○夜芝居^{夜興行の芝居だ。春の夜に適切な感じがある} ○裏町ゆきぬ^{裏通りのさびしい町を行くのだ} ○水ぐるま里は月
夜の^{水車が鳴つて居る}月夜の里をいふ ○名は知らぬおほ樹^きの上^きに^{月が懸つて居るといふのだ} ○枕上^{まくらがみ}らべ ○妻

戸のひまの^{妻戸は両方へあけるやうにこしらへた戸で、縁のはしなど}に設けられてある。その戸のすきまから月がさしいる意 ○美^よき人を ○こ
の宿^{ゆな}の湯女^{ゆな}うつくしき^{この温泉宿の女中が}美^{うつくし}くしいといふ意 ○昔男^{伊勢物語の「昔、男ありけり」の「昔、男」を成語として、業平を呼ぶ別稱} ○昔男^{男」を成語として、業平を呼ぶ別稱}とすると ○女つれて^{天明の俳人與謝蕪村の作に「女俱して内裏拜まむおぼろ月」といふ句}がある。女俱して^{は「女つれて」に同じだ。この句などから聯想して一}首を構成するの^{も妙であらう} ○花ぬす人よ ○手はとりしま^{二人手をとる} ○柱に倚れば ○戀
人めく^{を戀人らしくな}るの^{をの意} ○沼見ゆる丘^{をか}のはづれの ○橋半^{なかは 橋を半分渡り} ○海の遠
音の聞ゆる^{を遠い潮の音の}意 ○牧の羊か^{牧に飼はれて} ○衣白し櫻も白き ○黒す
める山の杉生^{すぎふ}の^{山の杉の木の高く立つて居るのが黒} ○おほ寺に寝て ○櫻かづか
む^{櫻をかざさ}む^{うといふ意} ○おほ空は薄紅^{うすべに}の香に ○初めて逢ひし路を照せる^{初めての下「君}
見れば ○安からむ夢を思ひて

五句が、この一首を生かしてゐる。
また暮れきらぬ機であらう。

「行道びとは、經を讀みながら道を歩む法師。ほの黄ばめる」といふ淋しみがこれに適して居る。自然に寄せた情味のこまやかな作。
おほらかな作、四句の「のどかに」がよく利いて居る。

春の夜の月のあはきに厨の戸誰が開けすてし灯のながれたる
若山 牧水
なぎさへの藻草昆布のむらがりなつかしいかな春の月出づ
北原 白秋

春の月ほの黄ばめる長縁を行道びとに似て歌ふかな
與謝野 寛
春月よ別れて遠きふるさとの杉のはやしのしづく照す
水野 葉舟

帆柱の二本のなかの春の月人はのどかに戀をかたり

淡くいひすてた中にしとやかな情味が出て居る。
八阪の塔は京都東山に在る。十餘人が動いて居る。

地儀

◎春の山—山を焼く

山なり野なり水なりが春の日の下に何ういふ特殊な姿を示して居るか、そこに感興を喚んで試作すべきである。

ぬ
春の夜の月の中にもかくれましおもふと君に告げえたるのち
吉井 勇
茅野 雅子

十餘人縁にならびぬ春の月八阪の塔のひさし離ると
與謝野 晶子

語彙

○春の山 ○花の山 ○春の山路 ○山を焼く
花の咲く山 ○春の山路 ○山を焼く
枯草を焼いて新しい草を發生せしめる爲

めである ○山焼き同上 ○峯に尾に山の高い處が峰で、山の裾 ○山ふところ 山中のふところもつ ○山そばの 山そばは、山の側面といふ義と、嶮 ○山は峽かより 峽は山と山との間をいふ ○山々まろう ○鳥啼さやめば ○一山さんの櫻さくらちる日や 満山の櫻さくら花が同時どうじにちるといふ 義、ひろくとして、華やかな感じ じが現 ○麓ふもとの寺のおほ鐘かねにこの鐘かねの音が満山まんざんにひびいて、こたまするなどはおもしろい、はれる ○小松まじりに ○今年より温泉おんせんの道みちつきて 温泉おんせんへ行く道みちがついたこと、山間僻遠さんかんひくえんの地は俗化ぞくかであらう ○手招く人よ ○湖もあり ○いづこ水の聲こゝろの聲こゝろがゆるやかに春らしい心こゝろくさぬ ○湖もあり ○いづこ水の聲こゝろの聲こゝろがゆるやかに春らしい心こゝろ ○群山の聳ゆる ○小さき都 ○まづ焼く山の ○山禰やまね宜よろのましろき髻むすぶに 山禰やまね宜よろは山の神かみ宜よろである。白い髻むすぶは尤もこれに調和する ○城ありしあとも 田いりや畑はたけになつたとか草くさいたづらに生うひ茂さかつて居るとか言いつてつゞかせる ○焼やきすて、 ○焼かぬ日はなし ○焼あとの黒くろき匂におひに 黒くろい色いろになつて居ること。新草あたらしくの若々あたらしくしいのがその黒くろすんだ中

から發生しやうといふのだ ○かしこよりこゝより焼やきて ○白しろき烟けむりよ 燃もえさしの烟けむりが白しろく立ちのぼつて居るといふ場合に適あしやう ○風かぜせぬ夜よごろ 風かぜ吹ふかす、のどか ○割わり籠かごしてゆゆく 辨わ當あを持つ ○若わ草くさの上うへ ○父ちち母ははのやすらに老おいいし ○けふか焼やくらむ ○小雨こゆふり來きぬ

「走り火はは風の勢いきほにつれて火ひが走ること 勢いきほの旺わな活い氣き横よこ溢あといふ作さだ。」

「よべの狐きつねを」は「昨夜よべの狐きつねのわるさを」と云ふ意。春はるの山やま居いの若わかい二人ふたりのさまを想おもはせる。

「古軒ふるのきは古い家の軒のきの義ぎ、四句しきうで切きつてさうして遠とほく見みえる

隣りん國こくに走はり火ひさすなしづまれと山やまををるがむ山禰やまね宜よろた

ちよ 與謝野よせの晶あきら子こ

春はるの山懸か樋ひの水みづのとまりしと昨夜よべの狐きつねをにくみ給たまひぬ 同

椎しの木ぎの暮くれれゆくかびの古軒ふるのきの柱はしらより見みゆ遠山とほやまを焼や

景色で結んだ。鄙びてさびた夕ぐれの景色に山焼きの火の紅を点した。
二、三句は、この作者の前の「空は空の色に霞みて」と同じ句法だ。

若山牧水
春ふかし山には山の花さきぬ人うらわかき母とはなり
前田夕暮

◎春の野―野を焼く

語彙

○春野 ○春の野 ○小野 小さい野と云ふ場合と、小は單に添詞で野に同じ場合と二つある ○ひろ野 ○野路
○野を焼く 前の山を焼く ○焼野 焼けた野 ○野火 野を焼く火のこと ○野火うつる遠
野の空や 野を焼く火の色が、遠い野の空に紅く映るさまをいふ ○風たえし夜を ○右に左に ○烟は低く川
原のかたへ 火がおとろへて ○しめじめと雨はふり來ぬ しめくは、しめやかにとは
とはすこし違ふしと ○野木の幹 みき ○樹に倚りて見る この一句景情目に浮ぶ ○空はうるみて

て雨を持つ ○國の境の山は高からず ○夜半のうす闇 ○あけがたの風 ○人が
げ黒し 野火を見て居る人の ○遠白う ○眞ひるの光 眞ひるの日 ○見つゝ過ぎゆく
○野がへりを 野に耕作して居る場合と、野に ○雪の残れる 木陰の冷たい草の中などに雪の残つてあるさま
○草かげろふや 草に立つかけ ○口笛ふけば ○ほそき鞭とり 驢馬などに跨つてある公子と觀ても可い
○川に出でにけり ○水の煙の ○山寺へ小逕 こみち はるばる 小路がうねくとして續いて居る景色だ。彼岸詣
れば收まらぬところ ○また一里 ○山こえて ○うす紫の夕ぐれ雲に ○この野
の草の踏みごころ なよくとして、柔かい若草が一面に生じて居る野の景色が見えるやう ○月はのぼりぬ
西洋の理想畫を見るやうな所がある、少くとも畫家の見つけ所である。
ふわふわとたんぼぼの飛びあかあかと夕日の光り人の歩める
北原白秋

知らずには菜種の花を
摘み取つてゐたので
ある。

象徴風の作だ。氏が
歌壇に於ける新しい
試みである。

激越した情感が奔流
の如く一首の表を馳
せて居る。

春の光野に満ちてゐ
るさまを詠じた。

いつのまに摘みし菜たねぞゆびさきに黄なる一本持て
る物思ひ
若山牧水

君がこゑ雲雀のごとく落ち来る見ゆるは春の野邊のむ
らさき
與謝野寛

野火のごと思は走れ國過ぎり山こえ君が胸を焼くべ
く
尾上柴舟

とある草ひと莖つめば一莖の小野の春こそをかしかり
けれ
金子燕園

◎春の水―春の川―春の海

語彙

○春の水 潺湲とか溶々とか云ふ形容詞はそれぞ
れこの特性を言ひ現はすに適して居る ○春の川 ○春の海 ○春海

字數の都合で斯う ○いさゝ水いさゝか春の 同語をかされてのどかな、軽い感じを出す
詰めてもいへる ○いさゝ水は小ながれなどの意
場合だ。「いさゝ水」は小ながれなどの意

○さゝ波 ○さゝら波 さざれ波ともいふ ○みち潮 や潮が満ちて來
た時をいふ ○干潟 この解、
干潟上 ○十あまり白帆あげたる 白帆に春の日が一ぱいに當
つてやがては霞みゆく景色 ○古沼 のかずの古沼

があちこちに在るのだ。水國の、沼の多い山のさまだ。富士
八湖と云つて、富士には沼みたるやうな小さい湖が入つもある ○洲の遠近を 洲は水中に砂地
ありこちに此砂地が ○水脈のひかりの 水脈は河や海の中で舟の通
路となるべき深い處をいふ ○あまり静けし

○島より島へ 霞がたなびいて居る ○藻草まじりの名なし貝 ○みなと江の 江の
といふやうな時だ ○藻草まじりの名なし貝 ○みなと江の

とに續い ○遠淺の島まで 遠淺になつてゐる島まで風
が風いで穏かな日和の日 ○白鳥よ汝が翼の ○

岸ぐさに曳舟びとは 岸にあな／＼と生えてゐる草のあたりには、曳舟する人が見え
るといふのだ。曳舟をする聲も春だけに悠長にきこえやう ○港

岸ぐさに曳舟びとは 岸にあな／＼と生えてゐる草のあたりには、曳舟する人が見え
るといふのだ。曳舟をする聲も春だけに悠長にきこえやう ○港

岸ぐさに曳舟びとは 岸にあな／＼と生えてゐる草のあたりには、曳舟する人が見え
るといふのだ。曳舟をする聲も春だけに悠長にきこえやう ○港

入り入る時舟の港に ○水ぬるむ頃 ○木ぶね土舟土舟といふと狸のお ○朽ちて黒める橋
 柱田舎でよく見 ○夕川の川 ○空の青海の緑青と緑とでは、ヒドイ色彩の違で ○白
 鳥の忍び音かなし忍び音は忍び ○鳥守は野守うらやむ鳥守は島の番人野守は野の番人。鳥守がある時野守を
 羨んだといふの其 ○春の水見る ○子らのため掘らせし池の ○浪華津戀しなにはづ
 動機は聯想に任せる ○春の水見る ○子らのため掘らせし池の ○浪華津戀し
 浪華津は大阪の古稱。大阪と云つては雅でないから、古稱の優
 なるを用ゐたのである。戀人が大阪にあるのを戀しく思ふ時だ ○大河の岸べに住みて
 ○裾模様その觀世水くわんせいみづうらうらゝかに觀世水は光琳 ○草にひそみて野の水が行く ○
 療にはだつみ 雨後地上に溜水が流れてゆく ○到るところに ○川あれば橋あ
 りこの橋は小橋だ。野中 ○筏士筏をあやつつて居る ○新しき舫もやひの綱舟をつなぐ新
 と。新しいといふのに ○生寶舟いけす 魚をいけて ○欄欄の下には、春の水が流れに倚ると春の心持が出て居る ○欄欄の下には、春の水が流れに倚ると春の心持が出て居る

夕ぐれの雲が映つて美
 くしいといふ場合だ ○鐘鳴る夕 ○右し左す支流が二つに分れ ○くも手に流れ
 蜘蛛の足のぶツちがつた ○故郷小野の ○春の海の聲
 さまに流れるといふのだ
 「知恩院聖護院は、
 京都の名寺だ。むら
 さきの水は、曉の山
 の紫の色が映つてゐ
 るさま。
 ひろくとした大き
 い作だ。胸がすくや
 うである。」
 春の海を悲觀したも
 の
 春のしなやかな感じ
 が大海に對してもあ
 らはれてゐる。
 み眼ざめの鐘は知恩院聖護院いでゝ見たまへむらさき
 の水 與謝野晶子
 ささらぎや大河の水の音たてゝ流れはじめぬむさしの
 國を 水野葉舟
 悲しみて見る日は白し春の海白きながらにたそがれに
 けり 相馬御風
 いつとなうわが肩の上にひとの手のかゝれるがあり春
 の海見ゆ 若山牧水

動物

春の動物の特徴は先づ其の聲の滑らかに麗らかな鳥に依つて表はされる。羽の色の奇麗な蝶も濃やかに春の色を出して居る。

鶯—雲雀—燕

語彙

○鶯の初音さゝぬとうぐいすかじ ○鶯籠うぐいすかご ○鍛鶯 ○み山うぐひす深山に棲んで居る鶯のこと ○ひな鶯 ○さゝなきで低いこゝろ啼くこと ○朝ひばり ○ゆふ雲雀 ○揚ひばり ○濡つばめ雨にたぬ ○岩燕燕の一種山中に住む ○しのゝめ時をしらしく明けの時をいふ ○竹原の朝の雫に雨後の景色だ ○山火事山火事は例の山焼だ ○果實畑の ○啼く宵もあり月にうかれて夜なきす ○聲遠き日は ○沼への路の沼へ行く路のこと ○午さがひるすぎ ○聞くひと日さかぬひと日の ○とゝのひ初めて鶯の歌のふしが、それらしくなりかけたこと ○

隣に高し鶯のこゝろ ○夢もなきいく夜ついで心に思ふ所のな ○閨戸のかたへ ○日もゆふべ ○歌おもふ時 ○鳴き立ちぬ ○水汲む業の ○木の間の空は木の間に見える空を云ふのだ ○落ち来る聲に雲雀の ○草の古巢草の中 ○麥生の中の麥の青々と生えて居る中 ○岡ごえのみち岡を越える路 ○洗ひ干す去年の古籠 ○朝雲の遠かた空は朝の雲が方へ紅を流して居る時 ○大海わたつみのうへ ○山田の水の畔あぜこえて水の満ち足つてゐるさま ○馬馴らす野の ○戻り駕籠かごの駕籠 ○夕曇 ○來しや 燕 ○遠き國より ○軒のふる巢をつくる ひぬ燕を迎へるためだ ○海越えて ○また逢はむ日の ○田面は雨の ○干し網に ○朝市朝ひら ○ぬかり路ぢのぬか ○麥の穂風ほかせの羽に堪へず雛の羽のやはらかなと ○港町みなとまち ○柳につらく小障子の ○かへす羽裏はうらの ○白き黒きに ○南の國のまらうど

よ○湖うみぞひ小村湖畔のせまい村 ○朝舟に○またも來こよかし
線のひろい、力のあ
る作。

上は人より雲雀へ、
下は雲雀より人へ。

「玉の夜床」は玉のや
うに美しくしい夜の寝
床のこと。

「山の手」は東京の高
臺のこと、下町に對
して云ふ。「午時」の
暖かさに脊は少し汗
じみて。

二荒山山火事あとの立枯れの白木のはやしうぐひすの
啼く

啼く

與謝野 寛

「何ゆゑに啼くか雲雀よ」「人ふたりさは何ゆゑに草に
ねむるか」

平野 萬里

われに似て玉の夜床にぬるものとうぐひすをこそ思ひ
やりけれ

與謝野 晶子

うしろよりうぐひす啼きぬ山の手の阪みちのぼる春の
午時

窪田 空穂

「青木が原」は、青い
木の立ち並んである
原、軽く春風のわた
るさまが見える。

雪崩といふ大きい裂
しい物に驚といふか
よわいものを取り合
せて見た。

うぐひすのふと啼きやめば一しきり風わたるなり青木
が原を

若山 牧水

雪崩なだれの日峽かみより峽に巢なごもりの深山みやまうぐひすみな啼き
たちぬ

金子 薫園

雉子

語彙

○焼野やけののきりす野を焼かれた雉子の○ほろくく雉子のなきごゑだ○片山かたやま雉子きじ

片山に啼いてゐる雉子のこと ○朝あさぐもり ○燒芝やけしほの雨あめの夕ゆふを焼かれた芝などに、雨の降り○草くさがく

れ雉子の長尾ながおの雉子の長い尾が、草の間に○旅たびたまたま草山くさやま越この旅をして丁度、草

えてゐる山を越えてゆく時、○小松野こまつのゆけば小松の生えてゐる野を行くとだ○子こや思おもふ雉子は子を

思ふこと

深い鳥として言ひ垣根つゞき ○畑を歩めり ○野守の子等と ○垣ねみちの小みち ○朝まだ
 唄へられて居る ○矢を負ひて落ちゆく雉子のは矢を負ひては古風に言つたのだ、今の銃獵で
 きこと ○堤に立てば川ひろし ○月ありあけて月がありながら、夜があけること ○日ぐれま
 で風情がない ○渡舟ある野の一人去り二人来り、渡頭常に人あ ○妻なしさいす ○ひとりし聞
 けば「し」は意味を強める爲め

「げうとく」は詰づる
 もの疎々しくなつ
 て居るといふ意。

二、三句は風向が變
 つて西へ火のうつり
 ゆく、その吹きつけ
 る方をいふ。

野の雉子山の雉子も来ては啼け御墓けうとく悲しささ
 まや (母の御墓にて) 窪田空穂

小野の火の西うつりする風しにも飛ぶは雉子よ春の夕
 ぐれ 原田輝子

「うす青し」はうす青
 く朝が来たといふの
 である。

ほろゝほろゝ雉子啼きてはやうす青し戸外は霞のふり
 いでしかな 内藤 長 露

◎蝶—蜂—虻

語彙

○胡蝶蝶といふ ○蝶重なりて行く ○熊蜂我國に産する蜂類の中で、最も大

外は黒褐色だ。之にきく刺されたら堪まらぬ ○尾長蜂 ○窓かけの ○きのふけふ蝶の來そめて春日のやう

るを覚えしめる ○川舟の帆影 ○墓原墓や場 ○舞ひつれて舞ひそるつて ○去りては來つゝ ○

野仕合のはてし ○手枕の艶めなまきごゝろ ○春うらうら春の日の光りのうらうらかなこと ○

人待つゆふべ ○花摘む君 ○黄と白と ○手にもとられず ○かざしの花を ○

花にすがりて露すへる ○霞の中にまぎれてましを ○われも寝む ○埃ほこりをさ

んだのであらうかの
意。四句は奇警な著
眼だ。

窓外には、春の眞晝
日ひが明るく射して居
る。

の中

蛇ひとつ君とゐる室まの菜の花にこゝろあるらし窓去いな
ぬかな
金 子 薫 園

植 物

うす青い草の色、うす紅、うす紫の花の色、濃い色彩
の目を射るやうでない處に、おつとりした春の心持
が看取される。

◎春草—わか草—わか芽

語彙

◎春ぐさ 若草はまだ生えたと初々しいが、春草に
なるとなまよくと春らしい心持が出て来る

野◎若草野◎むらむら青そんごうしつて青こいこと ◎水流れたり◎片岡の◎一つ緑に

◎藉しくによしなし草が藉くだけに伸びてゐないこと ◎雲みるゆふべ◎若さいのち青春のこと ◎春

の光に◎名なし小ぐさ◎路の芝ぐさ◎美しくしき妻すまと住すまひて◎湖みづうみへなだら
に下くだるならなつてある ◎遠とほめ目に牧ぼくの遠く見えること ◎雪ゆきとけ初はじめて◎濃うすき薄うすき◎踏

みゆくや◎まだ蝶ちょうも来きず◎いづれを摘とまむ◎下した萌もえ出でへ

◎萩はぎの若芽◎芒ぼうの芽◎荳まめ芽◎柳やなぎの芽◎牡丹ぼたんの芽美しくなるに◎並なみ

立ちて芽をふく木々のその木の芽みな春の日にけむつてゐるさまは綺麗きれいな景色 ◎蘂ひこはえ伐えつた根ねから ◎白しろき鳥

あげ沙しほおひて◎大河おほの水や濁にごる◎ひとむらは小草こくさの中に◎朝あまのあまのあまの

の懐なごしきころ

「南みなみおもては南面、
悠揚ゆうやうとして迫せまらぬ處
がある。」

木の芽つばきふく南みなみおもての日ひあたりありに今日けふも来きてなく名なも
知らぬ鳥
佐々木信綱

優しい、惹きつけられる作。

「勿忘草」は、水淺黄色の花がさく戀味をもつた小草。

「世づかざる」は情を知らぬこと。

春草のなよ／＼と和らかな趣に斯うした極端な事をも考へさせた。
春草の軟かに緑を敷いてのどかなさまを詠じたのだ。むら

忘れてもありし日おもふ若ぐさの堤は人とあゆみたまふな
相馬御風

遠き聲にわれを呼ぶごと春の日を勿忘ぐさの若き芽かをる
水野葉舟

世づかざる春の白魚と海草の芽ぐめるほどの戀おぼえけれ
佐瀬蘭舟

誰ぞきたり紅き血ながしはなやかに死ねなど思ふ春草に寝て
與謝野晶子

春の草なよやかなるにうら若き男をんなのむらむら寝

むらは、ところ／＼にかたまつての意。 — る

金子薫園

●梅—桃

語彙

○梅の花 ○梅が香 ○白うめ ○紅梅 ○紅梅しら梅 ○薄紅梅 ○落梅

笛に落梅の曲といふのがある。梅のちる時、此曲を懐ひ出さるるをえな

い。こゝは、その曲の事を言つたのぢやないが序だから附記して置く ○梅月夜 梅のさく頃の月夜 ○

緋桃 ○白桃 ○ひめ桃 桃花の美稱 ○桃の日和 桃のさくころのうららかな日を云ふ ○ゆふ闇の ○かたき

蕾に ○みづみづし若枝のみどり みづ／＼しは、若々 ○梅林 ○香を懐かしみ ○

江の南 ○淡雪に似て 梅花の白いのをか くよそへたのだ ○風なほ寒し ○いくもと梅の速き遅き

花の開くときの早い ○わが宿の ○蕾がちなる ○さし櫛にまだ春さむき ○鐘に

ちる梅ほの白し たそがれ時の景色だ ○ふる戀びとよ ○この花のかしこさ憎き 梅花の賢人ぶつて

あるのが ○母が喪の明けて寂しう ○白きひつぎの ○闇あやなしや 闇のくらさ
憎いこと ○柴の戸さしぬ 柴の戸を
しめたこと ○鶯も来ず ○野をゆけば ○住みつきて里ひ
と月の ○家みな低し ○むかし昔昔なる ○下照るいろの ○牛叱るころ ○
小板橋 ○繪だくみ泊めて 繪師を
宿して ○草の家は ○寛の竹は裏山の ○四つ目垣
ひく、結べる 四角の目を立て、編んだ垣を四つ目
垣といふ。それを低くつくつたこと ○潮来る川の 潮のさして
来る川だ ○牧場
に出づるうねり路 みち
うねりと曲
つてある路 ○よもぎ餅 よもぎの芽の出たてをむして、つきま
ぜた餅のこと、草餅といふのはこれだ ○
古城のあとの ○この池の魚は肥えたり 魚の大きくなつたこと。主人
の手あてのよいのを想はせる ○瓦焼く烟
白しや 春の夕の、霞んでのどかな
心持の出で居るのが見える ○酒貯へて ○み寺詣での一むれに 彼岸まゐりの
一あつまりりだ
○幼かりし日 幼少のむかしな
追憶する場合 ○世づかぬ程の戀もせし 戀をしたと言つてもそれは
淡々しくうひくしいとの

と ○白壁ぞひの桃林 白壁の家に沿うて、桃のうす紅に咲いてある林が見える
といふ意。これだけでも一首を構成することが出来る ○村芝居
ありと待たる、 村芝居の催しがあるといふの
で、その日の待たれること。
三、四句新しい観方 だ。梅も斯う詠めば、
立派に生命を得て来
る。
「聴法」は説法を聴聞 「聴法」は説法を聴聞
すること。梅ちる夜
の横河の御寺の清く
閑けさを偲せる。
二、三句おもしろい 二、三句おもしろい
言ひかただ。梅のか
なりは他のものとか
へることが出來な
い。 「君をゐては君なつ
君がかの日童に似たる幼さを思ひいでけり梅のかをり
に わらは
に 君を牽て竹生のうしろ桃林のかしこと指して岡を下り
花 ちゅうはふ
りうによ 聴法や龍女もまじりおはす夜か横河は鐘に白梅のち
る とら
る 君がかの日童に似たる幼さを思ひいでけり梅のかをり
に わらは
に 君を牽て竹生のうしろ桃林のかしこと指して岡を下り
水野葉舟 水野葉舟

れて。「竹生」は竹林。

あどけない 艶味の
ある趣をうたつたも
の。

「かじけさく」は、い
じけて咲くこと。観
たまの景色。

ぬ

白桃の花はむかしの戀人の世づかぬに似てこころにく
けれ

金子 薫 園

山村や土藏のかげにかじけ咲く梅ひともとの春の夕ぐ
れ

同

◎椿—木蓮

語彙

○白椿 白い花の椿、美稱し ○べに椿 ○つらつら椿 椿の花のさき列つてある
つらつら椿とも云ふ

「つらつら椿」に見れどもあかす云々しと云ふ歌がある。つらつらにはつくつくといふ意
軽妙なつとけかたである。無邪氣で巧を弄して居らぬところが、うれしい ○落椿

○八重ひと重 椿の八重に咲くのと、一重に咲くのとをいふ ○水に落ちて花が ○落ち

て聲あり たりバサリといふ音が、あ ○山の井 ○古庭の苔滑かに 青く、すべりやす ○家

鳴を飼へり 古い池があつて、そこに家鴨を飼養して居る場合だ。その池の近處に椿が咲いて

なくなつてあるもの、その場合 に適合しやう。繪のやうな趣だ ○しばし淀みて流れゆく 淀みてはと ○沼舟は岩を

漕ぎつゝ ○日に疎き 日のあたりの ○藁小屋の裏の幾坪 その幾坪かの明き地に椿が

びてるやうな景色とも ○掃きもせず ○きのふの雨を ○繁葉がくれに こんもりと

あるひまに紅い ○糸にぬきては糸にとほ ○ふる郷の古き家居を思ひ出でぬ そこ

き一本の ○幼うて寺に過し ○若かりし母 母の若かつたこ ○いく巻の經も

寫しき ○講座をぬけて 法話などのある場 ○うら山みちの ○百間の廊 長い百間も

○踏みへらされし階の 寺の ○圓窓の北にむかへる 北向き ○庫裏に人なし

庫裏は寺の
 臺所である ○垣越しに○わが讀む經の聲愛でしその何人なるか ○落つるを見
 つ、木蓮の
 花のだ ○白木蓮これは、白色の花のさく木蓮であるが外に紫色のものさくそれに緋の
 色がまじつて居るので緋木蓮といふ名がある。白木蓮に對しての名だ

○木蓮花

上句、ほたりほたり
 ちるさまが動いて見
 える。

「白衣の肩」は白衣の
 上から見て、ほつそ
 りしたやさ肩のも。

木蓮の花は大きい
 サリ／＼落ちるたび
 「胸に應へるのだ。
 見てある夕」はよく
 其場合をあらはして
 居る。

椿ちるべに椿ちるつばさちる細き雨ふりうぐひす啼け

ば 與謝野晶子

袈裟の下の白衣の肩は木蓮の花より艶に見えたまふか

な 同

木蓮の花おつるたびわが胸に響おぼえて見てあるゆふ

べ 相馬御風

「古伽藍」は、古い寺
 院。「壁畫」は壁の裝
 飾畫。

「笑みかたまけて」は
 笑ひこけること。

古伽藍剝げし壁畫のあと嗅げば白木蓮の花の香ぞす
ふるがらんは
 る 金子 薫 園
 椿こそをかした花なれ灯の前に笑みかたまけてくづれぬ
 るかな 同

○梨—連翹

語彙

○梨の花白い大きい花、薄 ○梨島梨を ○梨棚 ○山梨 ○梨の花散る夕

月夜 ○夢より淡き薄月のさま。梨花に調和す ○戸扉に倚りぬ ○小家勝なる ○雨雲の ○早

う戸ざせり ○只白し ○川音の静けき月夜その静けさに、梨の花 ○亡き姉も來

む ○ふと思ふ君は遠びとこの時、何となき ○總の少女上總下總あ ○ふゆ小雨 ○

哀愁を覚えしめる ○總の少女上總下總あ

片岡の家○汽車より見ゆる○遠富士はまだ暮れはてず霞の中にほの白く見えて居る○連翹のうす黄の雨を○常盤木多き庭のさま○下枝しげの年々枯れて○鳥も来ず○うするゝ夕日○垣の結ひやう○朝日に寂朝の眺めの寂しいこと○たとへば君に忘られて忘られては、忘られての意。自分といふものが、思はれなくなったこと○尼寺に姉訪ひし日の○庭の薄日に○風すこしあり○鳥は何鳥○垣となり○下ぐさに散りて侘しき○黄金のいろの連翹の花をいふ○松ひと木○瘦せて幹も老いぬる○雀来馴れて○疎まばららに植ゑし植ゑてある○亡なき父の遺愛かたみも枯れぬ○山茶花さいなんくわの繁葉しげはがくれに○小笹のうへに散りてぬ○蝶も来ずはつきり○ひと日の雨の○遠き目にまがひて見えすせぬこと○おほ寺の庭

「ほの白き」は梨の花の形容だ。

「うき身」は、憂多き身、「さびしら」はさびしに同じ、「ら」は添詞。

「心ほけては」は心がほけてはた。

◎櫻花—落花

語彙

○櫻花 ○一重八重 ○初櫻 ○彼岸櫻彼岸のころにさく櫻、一重だ ○遅ざくら ○緋櫻 ○山ざくら ○朝ざくら ○ゆふ櫻 ○夜櫻 ○櫻月夜この解、前に出づ ○さくら吹雪櫻が吹雪 ○花ふさくら ○櫻狩観櫻のこと ○櫻時さくらのころ ○花見ぐるま ○花見酒 ○ちること

梨の花朝の戸くれればほのじろき上に山見る春の家かな
佐瀬蘭舟

戀さめしうき身おぼえて山梨の花さびしらにちるゆふべかな
笠原君代子

連翹の垣にゆふ日の薄れゆくさま見てありぬ心ほけては
金子薫園

花ざかり○花曇花のさくころ、曇り日が多いのをいふ ○櫻雨櫻の咲くころに降る雨 ○さくら襲表白く裏濃い蘇
 枋色のかされ ○櫻ちる ○花ちる ○落花 ○朝ぼらけ ○濃青こゑをの空に花ひるがへ ○
 風に咲く ○鐘やみて ○櫻いざよふ ○女ぐるま ○塗かりぐるま ○さいめく人の
さいめくの解前たいまへに出づ ○花にかくれつ ○手まくらに ○馬下りて ○ゆき暮れてたまたま
 雨の ○磯ざくら蟹はよそ目に 磯のさくらが咲いても 蟹は見ようとせぬ ○花に遠く ○車より来し
 人あまた ○暇いとまなき身の ○夕ぐれの星 ○水に近き灯ともしびのかず 樓の灯いくつとなく 華やかにともつて水
に落ちて居るさ ○いつか暮れつゝ ○ゆかりあるおほ寺の門 ゆかりあるは 由緒あること ○
よみち夜道も知らず ○山ついき ○ひと木は寂し ○青き渦まく ○端山はやまに立てば ○
ぎよとう濱のかた魚燈ぎよとうともりて 魚燈は魚の油で ともしたあかり ○うしろ姿を ○かざぬ人は ○よう

歩みぬとくようはの音便 ○花の旅寝の ○若かりし日よ ○老いぬ命の ○ものも思
 はず ○まぼろしに見む ○しづ心なみ 心のおちつか ○黒髪のみだれは誰たれの ○
 花ふみかねて ○下ぐさにつもり積らぬ 落花を軽い雪に 見なしたのだ ○遅れがちな人の
 手を あえかな人のさ ○かつ散るや ○散るべき花と ○夕風さけば ○おん墓の
 苔の香戀し ○うすいろに靄あする夕 花の色が、靄にこもつ て靄がうす紅に見える ○峯をごしの雲を懐なつかし
み 峯を越す雲をなつ ○欄おはしまの暖あたたまるまで ○眞まことひるは寂し遠びとよ ○哀しき姿 ○
をかしく思ふのだ をとめの命いのちを思ふ 花に對して少女の短 ○雲仰ぐ時 ○水おぼろおぼろ ○花散り
がたの 花のちりか ○笑める涙の頬のさまを ○笑みて迎へむ ○咲きそめて櫻
 やいく日 ○散り過ぎにけり

安らかに事もなく言
ひ下した處に春の氣
分が出て居る。

莊重な中に華やかな
趣を表はした作。

「春の蚊」といふと、
蚊も艶味がある。「萌
黄蚊帳」と「山櫻花」
とは配合がよい。

「妖艶」は、あくどい
美しくさである。變
つた観かただ。

「琴柱はづさむ」は、
琴を弾くをやめよう

君がゑみしかの日かの時大宮の花の木かげの今も見ゆ
るかな
佐々木信綱

み吉野にさくら咲きけり帝王の上なきに似る春の花か
な
與謝野晶子

雨の日は春の蚊出づる清瀧やもえぎ蚊帳うつ山ざくら
花
與謝野寛

妖艶に怖ぢむともしぬさくら花灰いろ空のたそがれ時
を
窪田空穂

ちる花に小雨ふる日の風ぬるしこの夕ぐれよ琴柱はづ
さむ

といふ意。

暮春の寐しいさまが
其儘に歌はれてゐる。

その老園丁の恐ろし
い眼がまだ二人の男
女の前にちらついて
ゐる。

「うれりぬぬ」はくれ
つてゐること。波の
青さが、一首に明ら
かな色彩を與へて居
る。

「うつくしき群」は、
幻想のかたちであ
る。

さむ
山川登美子

やゝ寒く風かはりたるたそがれを軽くも花のちり來る
なり
武山英子

うしろよりふたりを睨み立ち去りし老園丁がさくら伐
る音
吉井勇

行きつくせば波青やかにうねりぬ山ざくらなぞ咲き
そめし町
若山牧水

花ちる夜ふと目とづればうつくしき群よ遠より寄らむ
とすらし
金子薫園

柳

語彙

○青柳 青々と葉の若やかな程の柳を云ふ。葉が延びた夏の葉柳とは明かに區別がある ○門柳 ○川ぞひ柳 ○川柳 かはやなす
 柳の一種葉は桃に似て水邊に生ずる。「水楊」ともいふ ○浅みどり わか葉の縁うすいほど ○むすばいれたる もつれ ○しだれ柳 枝の垂れて ○愁は長し 柳の枝の長く垂れたのに ○なびくとすれど ○柳の糸を結びては また解いたりする。春の日門口に出て、人を待つてゐる時などの手すさびだ ○糸柳 しだれ柳に同じい ○圓葉やなぎ まるは
 葉圓くして、その縁は鋸の齒のかたちをして居る。その他はほと柳におなじだ ○古柳 ○柳かげ ○朝堤 ○行ずり人の顧みし 路ですれちがつた人が振り返つて見たのだ ○十あまり白き鷺飼へる 白い鷺鳥を十ばかり飼つてゐる家の裏口に、青々と青柳が春の日にけぶ
 つてゐるなどは、白い鷺に對して色彩の配合がよい ○此道は都へ近き ○入江の岸に ○夕庭の ○背戸を流るゝ里川の うら口の前を小川が流れてゐるのだ ○眼路の めざ かなたに 川があつて、その兩岸に柳があつて見えてゐる ○三條の二

條の小橋 京都の三條と二條にかかつて居る小橋のこと ○池浚 ふ 日 の ○貸舟もして 柳かげの小家に安氣に住んでゐるさま
 ○都の大路 ○水ありて月なき頃の みなれ 水馴棹 な 水につかひ ○君を送る ○舟は霞みて み 水脈 の みの 水脈の解 前に出づ ○岸の揺れ ゆ ゐる古き杭 く 杭 その古杭に春の日は ○芽をふきそめぬ ○筒井筒井づゝの戀も 伊勢物語の「筒井筒井筒にかけしまるがたけ云々」の歌から出典してゐる。其井筒のかたへに青柳が青々としてゐるやうなのは伊勢には無い所、青柳などあしらつたら面白からうと云ふのだ

おつとりして美しくい柳の おつとりして美しくい柳の かげに舞姫の麗姿 の麗姿を見るやう。

加茂川あたりの景色が見える。

三月は柳いとよし舞姫の玉のすがたをかくすと云へど

與謝野晶子

君によき水際 みぎは や春の鳥の啼くほそきやなぎは傘にかゝりぬ

茅野雅子

「手すさびに」は、手なぐさみにの意。

手すさびにつなぎし路のいと柳誰れその上をまたむすびたる
山川登美子

二、三句の意は、蛇の目傘をさした人のうしろ姿。

ものすねし蛇の目の中のうしろかげ如月ごろの青柳に似て
武山英子

平和な春の夕のさまが眼に見える。

ねこやなぎうすむらさきに光りつゝくれゆく人はしづかに歩む
北原白秋

◎躑躅—山吹—蘇枋

語彙

○白つゝじ ○丹躑躅の花 赤い花のつじ ○山つゝじ ○岩躑躅 ○きりしまの花 つじに似て小さい赤の濃い色 ○花つゝじ ○躑躅野に ○つま木こる つま木に爪折つてたきものにする木の枝

松の下 ○瀧ある山の山岨 山岨の解 前に出づ ○日の入りて後 ○咲きてぞ燃ゆる じつ

色の紅に夕ばえしてあるのだ ○赤裳の色を ○山ふかみ 山の深 ○夕影のほのかに消えて 夕かけは夕日

げか ○花に葉に夕日かゝやく ○野の路来れば ○赤土の ○川くまに山吹さける 川くまは、川の流るれの入り込んだ處

○垣づたひ ○踏切の小屋にひと叢 おら山ぶきの花のだ ○繭を煮る家 ○新しう井堰 かげ つくりて 井堰は用心をたゞへる處 ○渚もわかず ○駒とめて ○水を賞へつ ○

鮎のぼる頃 ○葉がちとなりて雨おほき ○朝寝の戸 日があうらゝか ○隣りて住みぬ ○しとゝの露を ○川原に馬市 うまいち ある日 ○名處の水に ○八重やま吹 ○花

蘇枋 すぼう 小さい赤がよつた紫の花。古めかしいさびた趣がある ○春の鈍日 にびひ ぞさせる 鈍日はにぶい日の光の、蘇枋の花に調和する。

「憶良」姓は山上、奈一 春日野の躑躅がなかに車する待ため今かも憶良等の來

良朝歌人の中に異彩を放つて居る。憶長等の來むはいかにも斯く感じさう。高山のほひこもりては、つじの潔いすがたが見えるやう。
「春日の宮」は春日神社、玉垣は神社の垣のこと。

「すがくし」は爽かな心持のこと。

「天平の人」は聖武天皇の天平時代の人。

む

與謝野 寛

山つゝじ小さけれど高山のほひこもりて山さびて

よし

平野 萬里

ゆく春の春日の宮の玉垣の松の根にちるやまぶさの花

花

與謝野 晶子

白つゝじ雨すときけるあけがたのこの寝ざめこそすが

すがしけれ

金子 薫園

花蘇枋花ちるころは天平の人おもかげに立てよとぞお

もふ

同

◎堇—菜の花—櫻草

語彙

○花すみれ ○すみれ草 ○白すみれ 白い小花、可憐の中に何處か天の世のほひがある ○紫すみ

れ 紫は、すみれの本色である。白い方がより多く俗はなれをして居る ○壺堇 花がつぼんで居るのでこの名があ ○堇野 堇の

てある野さうして皆花をつけて居る。天 ○新墾小田 新に開墾した田のこと。小田の「小上の野に對するやうな感じを與へしめる

がところなく生えてゐる ○道芝の中に 矢張、堇がまじつて居るのだ。前の田の畔といひ此芝の中といひ、諸君の常に目睹するところであらう

○紫はゆかりの色の ゆかりの色は紫の色 ○しきりに戀し 堇に對して人の戀しいこと ○清き清き清か

りし日の ○追憶 おもひで のみの ○うす紫は ○ちひさき神の 堇の中に、天降つて見えるといふのだ ○夢

ならで見む ○わが馬と君が驃馬との蹄にか 堇の花が、馬蹄にふれてあはれなさまに伏してゐるとかいふやうな時 驃馬

は馬と驃馬と ○水嵩ませる流ゆるる ○舟を上れば ○月は東に 蕪村の句に「菜の花は馬と驃馬と

のあひのこだ ○舟を上れば ○月は東に 蕪村の句に「菜の花は馬と驃馬と

に」とあるのを 〇畑の中みち 〇青麥のそなた菜の花 菜の青、菜花の黄、この二色のとりあはせがよい 〇菜

圃 はたけ 〇船宿の軒も見え来て 〇暇路はひよろく 〇潮の遠鳴 遠方で潮の鳴つてゐること 〇この村に

畫味 ある 〇ひと廓 ひとが 〇なだら阪 阪のこと 〇潮の遠鳴 遠方で潮の鳴つてゐること 〇この村に

水城 みづき ありてふ 城に添うて濠を構へ水を湛へたのでその城をかく名づけたといふ故事がある 〇三月 みづき がほどに鄙びつる 都か

の田舎へ来て三月ばかりにしか らぬが田舎臭くなつたといふのだ 〇富士と筑波と 〇大きななる河もありけり 〇ひ

た黄 き のするゑは 菜の花の眞つ黄色に咲きついでるはてに桃の花の林が何か見るといふやうな場合 〇いさゝ菜の花 菜の花の、黄のほども

ふい 〇菜の花ぐもり 〇菜の花月夜 菜の花のさくころの月夜をいふのだ 〇櫻草 日本の櫻草の花はうす紅色で蕪華草に似てゐるが

西洋のは青白い陰鬱な處がある 〇うす紅の氈敷きたるやうに 〇荒川の堤に來れば 武蔵の荒川堤は櫻草の名處である、堤上皆この花といつてもよい位 〇ロセチが描きし繪の人の その顔の色に似て居るといふ處、ロセチは英國近代の著名な詩人で

又畫伯 をも 兼ねて居た

「遠つあふみ」は遠江 「大河」は天龍川、蕪村の句を見るやう

「鄙めくものか」は 田舎らしからうかの意

「天のにほひ」は人世 のものではない香り

「青白き頬」は櫻草の 色を人の頬に喩へたのだ 「わな」は なほかなげのさま

遠つあふみ大河 たいが ながるゝ國なかば菜の花ささぬ富士を

あなたに あなたに

菜の花 はな にくぬぎまじれる野をおもひ來しやといふも鄙 ひな

めくものか めくものか

摘むとすれば堇は指にゆらめきぬ天 あめ のにほひの紫ふか

く く

櫻草青 さくらあざ じろき頬 ほ のわなわなと春さむき野の夕かせにさ

金 子 蕭 園

窪 田 空 穂

與 謝 野 晶 子

與 謝 野 寛

◎藤

語彙

○白ふぢ藤の花の白 ○紫の藤紫は、藤の本色である。上品でおつ ○藤なみの花藤の長い房が靡いて波のやうなのでこの名がある ○山藤山に生えてある藤。花房は自然のま ○藤棚藤の蔓を ○二尺むらさき紫の房が二尺ばかりもあるとのこと ○紫の雲に喩へ ○葉裏ふく風 ○花房 ○垂れて長し ○こぼるゝ夕藤の花 ○水にちる時同上 ○上り路の山は眞ひるの ○峠茶屋 ○麓茶屋 ○三町の瀧へ苔みちを辿つて行く途中、松などに ○山鳥を聞く ○酒も鬻ひきげり茶店では濁酒も賣つてゐる ○籠の渡しの今ありやなし 深山の谷の崖から崖へ繩を渡してそれを籠を吊つて人をわたすもの之を籠の渡しといふ、 ○川上の泉のほとり藤の花の所在地を ○田中の一もと松に藤のからんであるさまだ ○小峯大峯 ○深みゆく木立だんぐく木ぶかく ○春日女かすがめ

の舞衣ゆかし春日の巫女が舞をする時 ○白裳しらもひく春日少女を白い裳裾を曳いてゆく春日の巫女だ ○神の小鹿の所謂春日の神鹿だ ○大杉に雨ふりやまず大杉は春日の社内などにあるそれ ○日傘傘畳みこの日傘は巫女のさしてゐるものと観た方が奇麗だ ○反橋そりはしをさいめき渡る まん中の高く反つた橋を陽氣に語らひながら女づ れが渡つてゆくといふのだ。龜井戸の天神社内の太鼓橋を思はせやう。此社内の藤は有名なものだ ○あづまやに ○歌かきてやる舞扇巫女の舞扇に歌をかいてやる場合 ○水の音あり花が落ちてた ○倒れ木つちに土の濕しめりのそのじめじめして居る倒れた木へ藤がからま つて咲いてゐる ○垂花たりはな垂れて下が ○しづれて垂れ ○野藤 ○神藤かみふぢ 神社の境内 ○池をめぐりて ○長々と垂れて花なし暮春のうら淋しさを ○風ふくごとにはらくと小さい花がこぼ れる ○遠き音に名は何鳥かき啼ないてゐるのだ ○山家の軒の ○廣廂 ○霧雨のし霧雨は霧が濃くなって雨のやうに降るもの ○白木の宿の 塗り飾らす木地の材で作つた家をいふ ○しづれてさびし ○あ

づまやの闇の水の音と○紫に白もあやなしあやなしの解前あやなしのに出づ ○うつゝなき雨の夕
の雨の夕ぐれなどホシヤ
○夕姿藤の花の夕ぐれのさま、
「朱の廊」は、朱塗の廊下。色彩の勝れた作である。

神藤の垂り花はなめぐる朱の廊に日傘して入る春日をとめ
等 與謝野 寛

「飛鳥風」は、大和の飛鳥の里の方から吹いて来る風。

飛鳥かせ神代の雲を吹いて來ぬ春日木立の藤ぬらす
雨 同

水を見る樓ろうの四角のしら玉のはしらにかけぬむらさきの藤
白玉の柱、紫の藤、色彩の配合も上品である。

與謝野 晶子

春 雑

此の景趣から喚び起される情緒を歌つたものを収める。

語彙 ○春のあはれさ春は華やかなげつとした明るい中 ○うすらはかなしそこ

く果敢ないと云ふほどの意味 ○たんぼぼの穂の川ふわふわと飛ぶ春の小 ○おぼろかに靄に暮れて

○よりどころなし春の晝の明るい ○春の日の午後または春の午後 ○午前の町に櫻を見

ど ○けむりのぼれり ○春の雲見る ○ものかげもなし明るい晝の景色だ ○こゝろみに

旅人の如き心持になつて見る春の郊外 ○春の書春の日戀人の許へやる手紙 ○春の鳥 ○あたゝかう春のたゞよふ

○うつくしう胸に秘めたる ○春としもなし春のやうでもなく物さ ○路傍の人

に物言ひてましこころの切りに華やぐ時または反對にさ ○春のしづけさ ○春の力

は満てり○名も知らぬ小草に○春の林○一人歩めば○愁ひつゝゆく○け
 たましくも春の静かな晝を啼きいでし小鳥○鸚鵡の籠に○春の障子垣根のかけが揺れてゐるさま○人の聲
 香かなり○春の人○春の少女○電車待つ間の○春の電車濠端の春の電車の隅に物思ひしてゐるな
 ○空わたり春の鳥啼く○春の旅○小鳥の如く林の中をゆく少女○よろこびに○
 よろこばしき日の午後○午後はなつかし○故郷の春をかなしむ○晝の夢
 ○春を眺むる遠く春の景色を眺めてゐること○うつゝなし○春の魚安房の海より著ける船の上○港の晝○お
 もひ出づる日○おもひでもなし

春の空はつれに若い
 心持でながめられる
 と言つたのだ。

うらわかき瞳ひとみをあびて昨日見しまゝなり春の青の大
 空

尾上 柴舟

自己を客観した哀し
 みを見る。

新しい見つけ所であ
 る。春のあはれさは
 動かしがたい。

「春」といふ平和な氣
 分が「流れてゐる」と
 いふやうに感じたの
 である。

小さき身の小ささを知りてとこしへに住むべき春の國
 を見るかな

同

妻と二人とある貸家を見に入りつうすくらがりの春の
 あはれさ

土岐 哀果

草淡く青める野べに今日もまたしきりに春のながるゝ
 を見ぬ

金子 薫園

(二) 夏

○暮春のさびしさを送つてこゝに新しい力の籠つてゐるやうな初夏を迎へた。木々の著けた若い緑葉に射す日の光は努力すべき新人が活々とした氣の溢れたかとはかり輝いて居る。青い空、青い山、青い野、青い海……眼に入る自然の色は一つ青さに光つて居るのである。葉風、軽く渡つて香の樹の間を吹く。初夏、五月の節は、新しい詩趣の湧くを止め得ない。六月來り、七月來り、極熱火の如き世に常夏、カンナなど眞紅の花が、萬緑の中に、強い色彩を矜るのは、見事である。夏の

日の光は、すべての自然に強い印象を與へる。○西行の「路のべに清水なかる、柳かげしはしとてこそ立ちどまりつれ」と云ふ歌の中には夏の日の熱さも、水の透き徹つた色も、やつれた旅人の姿も目に見えるやうである。無論焼くやうな外光が路のべに流れてもゐる。作者は然う云ふ立ち入つた内容に就いて一言も説明してゐないで、それが此の歌の一句一句に表はれてゐる。此の歌の千古に亘つて生命の泉のくめども盡きないのはこゝに在る。夏の景色はかうかうである云ふ風に約束にばかり囚はれて内側に流れてゐる趣を捉へることが出来ぬやうでは、詠んだ歌の價値の無いのは言ふ迄もない。

時 令

暮春から初夏に移つて來た時くらゐ、自然に際やかな變化を見ることは少ない。丁度塞つてゐた目をバツと明けて、外光の輝きを見た時の感じである。

◎初 夏

語彙 ○夏は來ぬ ○夏來りぬ ○夏に入りけり ○夏は來にけり ○夏となりけり ○空のいろ夏めき初めてつて變つて、清鮮の色を呈して來たのだ ○若き命の○水を聽き雲を仰げば ○草みれば木みれば青き ○身は輕らかに ○もの皆にさやぐ音あり 初夏の風が草木に觸れる軽い響 ○しろがねの笛ふく如く 朝の野を涼しい輕風が吹き渡る感じ ○水晶の玉ちるひいさ 若葉の露の朝風にこぼれる感じだ ○先づたのむ木立の風 ○うすすみどり ○玻璃瓶に白花させば ○曉起の○静やかに爽やかに晴れて ○古き木立

の中の家○庭井のほとり 庭井は庭にある井戸、側は石で出 ○うら若き妻をめと
 りて○懸額の縁の白塗 繪額のふちの白塗は夏 ○うち開く廣き室數の○尺の萩
 寸の常夏○竹垣を結ひかへし日の○庭に下りて○耳にしたしき水のおと
 ○うすき衣のうれしきに○たきものす○初夏びとに

切株は何の木であるか分らないで居ると紫のわか芽が出たので桐のそれであるといふことが明らかになつたとの意。

音もなく然も無限の力を以て夏のおしよ

切株はうすむらさきのわか芽して桐となりけり六月來
 る日 窪田空穂

雲 典謝野晶子

音もなく人等死にゆく音もなく大あめつちに夏は來に

せて來るさまが見え
 る。 海岸の初夏を歌つたものだ。

◎夏の夕

けり 若山牧水
 磯山はなでしこ色の日にはえて絹傘ひらくはつ夏の
 人 金子薫園

語彙

○翡翠のとぶが涼しき夕 かはせみは沼の岸 ○夕風は海より來り ○血
 の如し 空の色 ○風だちし夕 風のみき出し ○石楠花の うす紅の花 ○磯くさき香の
 たゞよへる ○夕しづかに ○電燈ともり ○たそがれは來ぬ ○木かげの家に
 ○ハモニカを吹く 月見草のさく丘に人を待ち乍らふくハモニカ ○ネルの浴衣の ○なつかしき夕 ○静
 かに人を待つ夕 な ○丘を歩めば ○潮満ちきたり 海岸をゆく時 ○沼のにはひ たそがれ
 かに人を待つ夕 な ○丘を歩めば ○潮満ちきたり 海岸をゆく時 ○沼のにはひ たそがれ

つて一人物思 ひするなど ○菱あしの實青し夕ぐれ近い沼を舟 ○野をゆけば○柱によればその時
 夕あ ○赤き草花 ○けぶりわたれり ○灯の見えそめて ○夕ぐれて ○雨に
 くれゆく ○くるゝ磯かな ○音もなく ○岬はくれて ○夏の夕ぐれ ○さびし
 くも来ぬ ○二階より見る ○川をながむる遠く暮れゆく川面を ○つる草のかげ
 より ○鳥の音もなし夏の夕の風ぎた ○聲たてゝ見る淋しさにたへず聲 ○川音遠
 したそかれの静かなう ○かの一群の啼きかへる小鳥を指す ○かじか啼く蛙の一種
よりは腹せて足が長い。こゝろ ○旅の夕の ○夕ぐれにさく遠き三味線 ○森の方よ
こゝろと涼しい音を立てゝ啼く ○戸外そとへ歩めり
 夕あが近づそと ○戸外へ歩めり
 晩夏のさびしさがそ こともなく表はれて
 八月の避暑地の街まちのゆふまぐれひとりはかなく酒肆さかみせに

ゐる。
 「莊重の響きがある。
 「ゆふさりくれば」は
 「夕となれば」であ
 る。
 晩夏の夕べのあはれ
 である。
 「てまりの花」は小さ
 な白い花が繻のやう
 にさがりさく故、此
 の名がある。
 四句が一首の主眼點
 である。

入る 吉井 勇
 大君の城の五月の森林にゆふさりくればともる電燈
 若山 牧水
 君は泣くしづかに夏のたそがれの青葉の色の沈みゆく
 とき 前田 夕暮
 雨がへるてまりの花のかたまりの下に啼くなるすいし
 き聲よ 與謝野 晶子
 釣船のちひさき船にからみたる青菱あをびしの實をのぞく漕ぐ
 舟 與謝野 寛

静かな夏の夕の様が
おのづから目の前に
浮ぶ。

五浦の旅の作。

病める兒はハモニカ吹いて夜に入りぬもろこし畑の中
なる月の出 北原白秋

潮風に吹かるゝ山の石楠花の花そことなく匂ふ夕ぐ
れ 金子薫園

京の四條で詠んだも

京なまりかろくすべりて水茶屋の提灯の火の紅き夕ぐ
れ 同

◎夏の夜—短夜

語彙

○夏の夜○みじか夜○短夜音讀すると、つまつて、い○明け易き夜○
軒しづくはらゝにちれる雨あがりの夜風の涼しさは、
輕衣につめたいたばかりである○蚊帳の中の團扇づかひの
手の白さ。

の紹蚊帳の色は 水色に観たい ○河口の葦間の灯かす舟の泊つて居るさま。敷ある灯のひか ○水に

端居水がすぐ目の前を流れる時 ○寝姿のつゝまし人しどけなく ○夜網かけよあみ

たる軒ささ七日ばかりの月 ○宿直つがひづかれ宿直は終夜寝ないで ○樓禁中を守衛することのうへ水に面

の家などあす ○明日の船路明日船でゆく海 ○枕時計はやたちの○早立いそぎの準備早朝出發 ○衣

の篋はこのいろいろを ○眠なればまた揺れども覺さめず ○二尺ふたひらほどはなれてあり

ぬ ○君は柱に ○さらさらと洗ひし髪あをすの ○青簾あをすのそとは月光、水の如く ○泊

り舟ふねさゝめき更酒などくんでだみこかす酒などくんでだみこ ○櫓こしのおとの間遠まどほにひゞく間遠は、あ

と ○草ふめば草ひだの遠いに露あり ○寝ぼけし鳥寝ぼけのた鳥だ ○星おほくまた流れたる

○水見るひとり ○安らかに夢もありけり ○終夜よとすがら

「貫之」は紀氏、古今集、選者として、古の時第一流の歌人であつた。「女樂」は女の奏する音楽、短夜の事だから夜明けも程がながいので、帳の傍に侍して居つたさまだ。平安朝當時の殿上の一部はさまが伺はれる。「虫ひとつあて」が面白、次の夏めくと「いふ事に利いて居る」。「青き光」は、螢などの光、螢を隠して想像に任せる。濠端は東京の外濠をゆく電車を通りである。

貫之も女樂めされし樂人も短夜の帳の四面にはべれ

與謝野晶子

夏の夜は森の影ある遠かたに鳥のこゑして明けむとす

平野萬里

しめやかに雨さく宵の灯のかげに虫ひとつ居て夏めきにけり

岡 稻里

青きくさ青きひかりす濠端を電車たえたるすいしき夜半

金子 薫園

◎暑—涼—納涼

語彙

○暑し ○暑き ○暑さ といへば ○暑さ といへば ○蒸し暑き ○市路の風 街をふく風 ○

砂ほこり立つ ○片照りに雲は光りて ○ありなしの風 あるかな ○右の家ひ

だりの家の ○乾きゆく濱の刈藻に 日がカン／＼ ○人も見えず ○涼し ○涼し

き ○涼しさ ○涼み ○朝涼 ○ゆふ涼み ○涼風 ○涼しき夜風 ○すいみ舟 ○橋

の上 ○ゆきすりびとの この解、前に出づ ○浴衣すがたを ○女はらから ○端居す 縁に

近く出で、 ○青桐の葉風 ○釣床の上より見ゆる ○君と居て ○暮れゆく海のかた

○わすれ水 絶えなくで人知られぬ水 ○はたはたと風は日覆の 布をひる ○池より川へ

○小棧橋 ○漕ぎゆく舟を ○灯の流れたる ○街のぞめきの 街の雑沓のこと、こ

けなど ○夜まゐり ○遠き花火 ○橋守の小家のかたへ 橋守は、橋の番人のこと

○涼しき花を摘みえりて 一束にして君に贈らうといふやうな ○涼しといひぬ ○
月を待つとき ○夕立すぎし木がくれの星 涼しげに星

「葵に似たる」とは心
に「葵」の言ひかたであ
る。全體に圓みがあ
つて光琳の繪でも見
てゐるやう。

まいはひを著た若い
漁師が見えて来や
う。

海邊の夏の夜と、漁
夫の生活とが表はし
てある。

君とわれ葵に似たる水くさの花の上なる橋にすいみ
ぬ 奥謝野晶子

海邊の廓をのぞく若衆のゆかたすがたのをかしき月
夜 金子 薫 園

魚の如く漁師の妻のよこたはる涼みの臺のあさき宵か
な 同

人 事

夏の夕べ、浴衣すがたの若い女を見るのは他の季節に見
ることの出来ない美しくい人事である。日中の汗の匂ひ
などはテンデ浮んで来ない。

祭

語彙

○夏まつり ○夜まつり ○舟祭 ○加茂の祭 山城の加茂神社の祭。四月
の中申の日が、その日だ

葵まつり 同じく加茂神社の祭。舊四月の中申の日が其日
此祭にあづかる人冠に葵をかざすので此稱がある ○神まつり ○まつり日 ○

まつり物見 祭を見物 ○氏神氏子 ○神輿の渡御 渡御はおで ○山鉾 京都の祇園會に用
ゐる山車 ○一種

○手ぐるま ○大路 おほぢ しめく車のおとを ○人ごみの ○夜神樂 ○屋臺 ○若も

のは ○女客 ○賑はしき表どほりを ○隣町 ○張りあげて聲を命の いのち 花笠つけし

云々 とつと ○揃ひ衣と揃ひ扇と ○軒挑燈の兩側を ○踊躰子 ○やりすごす ○

酒の香のいくたりを○道のかたへに○花山車ひきし七歳の夏を○舞ごろも
 ○舞扇○舞姫○水色に花藻くづしの帯しめて○み社のかたへに名ある叔
 母の家○大店の○金の屏風に○飾り花○その群
 の中に君見し○日を忘れえず

「瓜見ゆる」といふので田舎の祭のさまが先づ目に浮ぶ。

一圖に嬉しく感じた幼き日の追憶がよくあらはれて居る。

「引馬」は飾りをつけて出す馬。

瓜見ゆる宵の細みちいつしかに祭にきはふ市に出でに
 けり
 夏まつりよき帯むすび舞姫に似しやを思ふ日のうれし
 さよ
 夏の雨稻荷まつりの引馬の鞍うつくしくしづくするか
 な
 同

窪田空穂
 與謝野晶子

◎更衣—浴衣—羅

語彙 ○更衣 ○衣更へて ○衣かへばや ○夏ごろも ○今日といへば
清い爽やかな

感じた覚えしめる日だ ○初めて若き命えし ○かをる衣を
折からの輕風にそよがして ○君は今 ○衣の宮

の蓋とれば 長持などの蓋を取 ○風こそ薫れ 若葉の香をもた ○戸に倚るや ○日の

光さ青に照りて 日の色が青葉にさして青い ○葉風よろしき ○うまし子と美し妻と 子は美

い子 ○父母を迎へまつりぬ ○つけ紐のみどり紅 小兒の衣の帯するあたりに縫ひ

○ふたりの親と ○故郷びとよ ○手なれの琴に ○朝湯の君に ○朝戸出の ○

身だしなみ ○浴衣地 ○白地の浴衣 ○そろひ浴衣 ○貸し浴衣 旅館の ○夜風あ

る街 ○そひて歩みぬ ○うす紅のした襲 ○髪かまねの香のときめきごころ 髪かまねの香に

こと〇ゆきずりびとのこの解、前に出づ。〇宵月夜〇をんな阪表阪に對して裏阪をいふ。〇わが爪のほのくれなるに湯あがりな〇雨ふる夕〇寛くわんぎて〇このおばしまの凭りごちち吹いて心地よいこと。〇やゝ酔よひて頬ほでりうれしき〇旅館〇旅の身はもの氣やすきあたりに氣をかれるものも。心安いさまをいふ

「心わりなくしは。心
がわけもなくの意。
「汗の香」はわびしい
感じがする。

衣がへわが汗の香ものこるこそ心わりなく涙おちぬ
れ
興謝野寛

追憶になつてある少年時代の心持が率直に言ひ表はされて居る。

花散れば先づ人さきに白の服著て家いづる我れにてありしか
石川啄水

「臯月窓」は、臯月の日に凭る窓といふ義

臯月窓白芍薬のうすてりに衣がへせし姉をこそおも

「うすてり」は花に臯月の陽がさしたさま。

へ
眞夏の日きらゝに照りぬ糊のりごはの妹いもが浴衣ゆかたと庭なでし
金子薫園
ここに 同

〇扇—團扇

語彙

〇小あふぎの女もち 〇女扇 〇男扇 〇白扇何もかい 〇絹扇 〇檜あふぎ 〇檜あふぎ 〇薄板を骨として、こしらへた扇、むかし、殿上に用ゐたもの。〇繪扇繪をかい 〇舞扇 〇塗扇 〇京扇 〇古扇 〇末廣すまひろ 〇扇の異名、開けば末 〇扇紙を扇がたに 〇扇拍子扇を鳴らして謠など 〇扇が廣くなるからだ 〇扇折り折ること 〇扇拍子の拍子を取ること 〇扇かなめ 〇蝕むしはみて折目をりめあやふき 〇子骨親骨 〇忘れじのこと 〇かざしては招きし 〇扇を口に 〇手の白さ 〇はたはたと扇づかひの 〇叔父おぢの醫者いしやの 〇夜歩行よあるき

の○袖笠の手に持ちそへて袖笠は袖を被きて笠に代へること ○あふぎ合あはせ扇あはせへめい詩歌をかきる遊 ○人とりどりの○花塵はなごぎに○篋たかむしろ竹編める席を削つて ○船に居て○横日よこひにかざす○草の彼方かなたに人たそがれて○いつか眠りし○手すさびの繪も花鳥の○旅びとは宿の團扇を○絹團扇○繪團扇○奈良團扇○團扇掛○家土産いへづと○澁團扇○破れ扇○等閑なほざりに置きて失せぬる○主かじなつかしき○師の君のみ歌わすれず○其名を小さう書き添へし○うす墨の○三みとせはありき○憂うれき形見○橋に涼みし○君やわれや○晝寝ひるいのひとの胸の上土産に持ち歸つた奈良團扇で扇いたまゝ寝 ○破り捨てつ
「扇ふたつは、夕やみに人の姿が見えな」 扇ふたつ胡蝶のさまに夕闇の中をよりきぬ灯のあづま

いで手なる扇が二つしる「胡蝶のさまに」と。扇をひらいたさまは胡蝶の羽をひろげ巧やうに観たのだ。悪額あくがくに描ける女神は羽扇うせんを手にして、涼しさうに在す。ふと涼風の吹いて來たのを其羽扇からちやないかと思つた。

天象

◎青嵐—薫風

語彙

○青あらし晴れたる日、青葉をふく風 ○薫風初夏南方より吹く風をいふ ○五月風 ○風かをる○

青葉を吹く風の緑、夕立の雨の白、一方の熱苦しい感覚の反面として此等の快さが著しく感ぜられる。藍を流したやうな空の熱い光りも、それなりに快い。

與謝野晶子

やに わが舞へる扇の風に殿の灯を百の牡丹のゆらぎぬと見

山川登美子

白鳥の羽扇よりやと蒸す夜のふとの涼かせ繪の神に見

金子薫園

薫る風○風かをり吹く○夏の風○湖に雲遠き日の○むら立てる四方の山
 脈なみ○草ついでく○わが窓へ来てはまた去る牧の牛○小雨まじり○葉と葉ゆ
 れつゝ○木この間の空の木の間に見え○照る日の丘の片陰に○泉のめぐり白
 き花○水に枕のそめり○朝目すいしき○籬まがきの内外うちと○蟹おふ磯の○野末に見ゆ
 る風ぐるま○古からんき伽藍みちの森の路古い寺院へ行く森の中の路青き風行人の袖をふく○潮の香もあり○葉
 ずれの音の○沖のかた浪白う照る○草たゞ青し○この島に植ゑ試みし○
 離れ小島をじま○島守○よき衣きぬを君のまとへば○化粧室けはひまの○鏡いくつ朝々拭ぬぐふ
 ○温泉ゆの山は
 「胸たゞよはず」は、
 子雀が柔毛を吹かれ
 青あらし胸たゞよはず子雀の飛ばむともする翅つばさのふり

て、飛びもえざるさ
 まが見える。
 「石も啼くべき」は誇
 張して面白い言ひ方
 である。
 青い糸をひくやうに
 風が流れるといふの
 だ。
 清く爽やかな初夏の
 一面をあらはさうと
 した作。

や
 三井寺みやでらや葉わか楓の木下こしたみち石も啼くべき青あらしか
 な
 輿謝野晶子
 聳そびやげる皐月のそらの樹の梢うれに幾すぢ青の糸ひくか
 風
 若山 牧水
 君が指さすかたにくづれて白罌粟しらけしのひるがへりゆく皐月
 の風に
 金子 薫園

◎夏の雨—五月雨—夕立

語彙

○五月雨○さつき雨陰曆五月に降る雨だから此稱
 ○梅雨つゆ梅の實の黄熟する

の名が起つた。前二つと名が變つてゐても、その實は同じだ。じめくくと陰濕の氣人を不快ならしめる季節だ。つた。○梅雨霽つゆはれ長雨が霽れて、日の色がい。○小やみもあらず。○いく日いぶせき。日陰鬱くもりな。○降りやまぬ。○霽れむともせず。○大橋を市路へ渡る。傘さした幾人かの人の行きちがふさな。朝は花賣の奇麗な娘が通つた。夕方にはヨボク。○かゝり舟岸へ紡つ。○藁小屋の。○たまたま白さしの、めを雨あめが霽れた。○庭の片すみ。○思ひ出おもひだのみを。○雲の動ける。雲の切れ目が出。○おほ川を見る。蕪村の句に「五月雨や大河を前に家二軒」と云ふの來たのである。○おほ川を見る。此句のこゝろを歌にして見るのもよい。○蜘蛛の巢いとに。○ふと蟬のなくひと時よ。久々で日の光を見たといふのだ。○高草がくれ燈の。見えて草よりも家の方が。○米とぐ人に。○舟人ふねびとのもの。焚く烟。雨あめが小歇こけつんで、夕がたに低い景色。雨後のさまだ。○南のかたは。○晴れて雫の。○片照りに。○はた。○滲標しみづか。水脈を示す爲めに、その。○南のかたは。○晴れて雫の。○片照りに。○はた

はたと晝の戸くりぬ。雨あめがあがつて、戸をくる人に喜びの色が見えて。○遠松原とんまつら。今いまか。つて居る最中で、黒くぼかしたやうだが、こゝろ。○磯山かけて干網の。ついで居るさまだ。は晴れて居るといふので繪のやうな景色なのだ。○磯山かけて干網の。ついで居るさまだ。といふ心持が。○白き花あり。○薔薇の挿芽さしめの根や生ひし。芽こゝろが出たが根は生えたの。現はれて居る。○池ある家の水濕り。濕氣のヒドイこと。池の水が長雨に。○晴間を待てど。疑つて見た。○空かきくらし。空を暗くしての意。○空暗澹くらみと。空が暗くなつて來る。○大雨のふる。○空かきくらし。夕立の降るさまだ。○空暗澹くらみと。空が暗くなつて來る。時とき。○遠とほいかづちの。○とみに迫りて。五月雨春が墮おちたる幽暗いゆうあんの世界のさまに降りつゞきけり。與謝野晶子。小百日こひゃくじつ三つ葉せぬゆる朝がほの唇くるなりさみだれの

二句「春」を人に擬した。幽暗の世界は暗い、日の眼も見ぬ世のこと。
「小百日」は、ざつと百日、三つ葉せぬゆ

與謝野晶子

ゑは、葉の萌え出な
いからの意。
豪宕の趣がある。大
観の繪を見るやうな
景色だ。

家

草高くなびけるするに白かりし遠山とほつまきえて夕立きた
與謝野晶子

地儀

野に山に水に夏の自然の風物は強烈な外光を受けて、眩
しくも目を射る。夏の地儀の特徴は多くこゝに在る。

夏野

語彙 ○夏野 ○夏野原 ○夏野路 ○夏草の野 ○草野の夏 ○夏のみどり野
木草もたゞ青々とし ○露白木葉の草の青きに、白露の配色がよい ○草小逕 ○野中の泉いつ涸れて ○
牧場通ひの路ひと條 ○逃げ水晴れた日、野末の草の動いて、白々と水の流るゝやうに見ゆるさまをいふ。武蔵野特有の景趣になつて居る

○草より草へ ○朝の靄して ○別れ路 ○人里に近き ○刈る草の ○石切る
群の ○ほど近き小沼の邊りは ○山嵐はげしき日かな ○夜渡舟のちらく
灯 ○かくれ川瀬せせの小石の ○ひとむらの紅の花 ○山寺路の ○焼石に蜥蜴
眠れる 蜥蜴の背の金 ○小羊に水かふところ ○牧笛の ○白き蝶とぶ ○何花ぞ
眼に輝きて ○朝夕の市への路の ○牛は渴けり 牛のよだれのた ○葉末僅かに
風見せて 草木たゞ萎えて 生きた色が無い ○雲見れば目こそ眩めけ 極熱の日の光
快い自然の感じであ
る。 森出でゝあをき五月の太陽を見上ぐる額ぬかのなにぞ重き
や 若山牧水
曇り日や野に遠青き五月草さつきぐさわれとうなだれ濕ひぬら

かにも暑さうだ。浄罪界に云々は、伊太利の詩聖ダンテの神曲中から聯想したもので、清爽の情に堪へざらしめる。水晶の矢をさした具を負うて伴男たちの走つてゆくやうだと夏の野の朝のきらめいてゐるさまを形容した。

夏の水——(海、川、瀧、清水)

語彙

○潮浴しほあび海水浴のこと ○夕潮 ○朝潮 ○高波のきら／＼に夏の日が強くさしてゐるさま ○波のしぶきを喜びぬ ○黒髪に香る雫を ○眞砂路を丘へ ○蚕りまが家のふた室を借りて ○雨戸あまどせぬ欄らんのガラス戸 ○知る人に逢ふ ○岬みさきの上に富士見ゆる

窪田空穂

吉井勇

與謝野晶子

○濱の小橋 ○淺瀬あさな涉りて ○朝風あさなみ路の平ちのへかなさま ○夕映 ○その人の晝寢ひるいのひまに髪あげつ女心のつゝまし ○花守の家 ○出水でみづのあとの大水の出 ○岸草に葛も咲きそふ ○さゝ濁り少し濁つて ○涸れ涸れて ○草いちご葉隠れの實を ○素瓶すがめいだきて朝毎あさごとに素瓶は素焼きの瓶 ○大鋸おが挽ひきの木挽の ○晝も星うつると深谷底さか何か ○瀧の響 ○瀧の音 ○瀧壺 ○白雲の ○落ちよ落ちよ ○あたりの山も耳た敬たてゝ瀧の音を聴くだらうとつづけるので擬人したのだ ○山清水 ○岩清水 ○苔清水 ○眞清水
落ちよ瀧日のかげ白く照すらむ眞夏しばしのほどにあらずや
天の原にごれる海を源になしてゆくらむ梅雨つゆばれの

窪田空穂

二、三の句がよく活らいて居る。盛夏の日が光つてるやう。初二の句は後半の梅雨に利かしてある。

手の白きを百合に喩へたのだ。山清水の清冽、身に沁むものがあふ。水平線は空と海と相接して一線を劃したやうな處をいふ。海と空と一つ色なる藍碧のはてに黒影一點浮び來るのだ。

川

興謝野 寛

山清水うかびて白き百合さくとおもひぬ君が手をひた

す時

茅野 蕭々

夏の海威あるすがたをほこりに鯨は見ゆれ水平線

に

平野 萬里

動物

鶺鴒

鶺鴒

杜鶺鴒は夏の自然が生んだ、張りのあるあはれな鳥だ。血に啼く聲を重苦しい夜空に聴く時、秋のさびしさを導か

鶺鴒

○ほととぎす 帛を裂くが如く、夏を啼く鳥。もの思ふ人の腸を断た。不如歸とも異名がある。○山ほと

ととぎす ○初ほととぎす ○海の上のしら／＼明けをの海上を云ふ ○夜釣の舟

に ○夜空の遠の ○野木に居て啼く ○落人 世を忍んで、逃げる人のこと。多く戀ひ

れ みなれた土地を逃が ○關のゆふべを 世を忍ぶ人の夕 ○かゝる別れか ○戸をくれ

は ○ゆあみし居れば ○水おとに近き枕の ○草に寝て 仰げば空に白雲ゆるう流

やうな ○晝の月あり ○水棹の雪はらく／＼に ○いつかまた ○地震せし夜半 なみ

の 杜鶺鴒のこゑは、一種のさびしいあはれさを覚えしめる ○夕ぐれの雨 ○今は啼け ○君がり越ゆる片岡の

○雲のちぎれに ○啼きしきる夜と啼かぬ夜と ○そのひと聲 ○人こそ知ら

ね ○水ぐるまかたりことりと そのゆるやかな音と、ほととぎすの急促の音と緩急の對照がおもしろい ○松ふく嵐 ○

待てば來ぬ人の心を ○この宵のにはかに明けし ○水晶を磨ぐ甲斐の家 水晶

と杜鵑とは、何とはな
 しに似かよつてゐる ○誰が柩○呪ひの釘の夜半、此釘を打つ時杜鵑な○きぬぎぬ
 男女相寝て、あくる朝各自に著衣して別るゝことをいふ場 ○いつ満ちて缺くるや
 合と、單に相寝たそのあくる朝をいふ場合との二つある
 月の○遠びと○寝ざめがち○欄に倚る時○ほつれ糸いつまで解けぬ○素
 足してゆく○小笹道○月のぼるとき○まだ灯を置かぬ水あかり夕ぐれのう
 につ、水光の暮れの
 こつてゐるさま。

青葉の色、白髪の色、
 夏の日の色、杜鵑の
 聲、何れも相聯關し
 て居る。

「陀羅尼」は經文の
 名、これを誦讀する
 と聲が出てくるとい

木の下にしら髪たれしうしろ手の母を見るなり晝ほと
 とぎす 與謝野晶子

ほととぎす山の法師が大音の初夜の陀羅尼のこたます
 る寺 同

ふことになつて居
 る。「大音」といふの
 も之から出て来て居
 る。

凄味がある。新しい
 取材だ。

「糸のごとく」と云ふ
 観方は、獨自の妙が
 ある。

「胡桃若葉」は若葉し
 た胡桃である。

「山の火の空に見わ
 かす」實景目睹する

ほととぎす夢を築きてあこがれし幼き人も母となりけ
 り 水野葉舟

木がくれて牛屠る子が蠟燭に燐寸をする時ほととぎす
 さく 吉井勇

糸のごとくそらを流るゝ杜鵑あり聲にむかひて涙とい
 まらす 若山牧水

ほととぎす胡桃若葉の丘つゞき小雨になれし家のこひ
 しき 内藤長露

あかつきのまばしはいつも山の火の空に見わかす杜鵑

やうだ。

「母なき軒を」一首の主眼點は「こゝ」にある。哀思これより湧く。

重い眉をあげて覺えず聲する方を見た。

なく

土 岐 哀 果

信濃より今日も若葉の嶺越えて母なき軒をなくほと

ぎす

相 馬 御 風

相むかふ葬のあとのしづか夜を竹に風してなくほと

ぎす

金 子 蕭 園

④ 螢

語彙

○初螢 ○飛ぶ螢 ○流るゝ螢 草の間などを螢の流れる ○螢籠 ○宵闇の○

小簾まく手もと ほのじろく見える ○海の上いさり火ふえて だんく暗くな ○木暗しづ

けし 夜の森の中の ○草の葉ごとの○露にふく風 ○星のかげ ○日は入りて○

夕されば○葦間がくれに○羅の袖におほひて○衣の裏はふ○おぼつかな

しや○手づくりの籠にうす絹を 張つた、ほたるの宿を ○袖の香の○夜のかせ

も更けて○川中の洲に水さしぬ○出舟まつ宿の○宿の名の宇治は網代屋

宇治と網代とは聯關して居るので、屋號をシヤンてつけたのだ ○水草の浮葉○曳舟の綱の傍を○夜晒しの布の

上下○夜の花にすこし水やる○君の聲○おもかげに見ゆ○月をそがひに

立ちそひし○その人戀し○そのあたり松おほかりき○磯を宿への草月夜

草月夜は草に ○夜の趣を賞へ居ぬ○水甕に水いれかへて○夜目にもそれと

美しくしき人の螢籠など 持つて立つて居るさま ○待つ戀の○灯に遠く○夜露しとくに○衣ぬれて○夜

半の鐘つくと上れば○石の階○蓬の中の○晝の光を憐みぬ 日中の螢のある

五月にしつくり合つた情緒が出てゐる。

いかにも涼しい明方の景色。「松千本」に月光うす白くかゝつて居るさまは晝のやうだ。「精舎」は、寺院のこと。

ごゑかな

佐々木信綱

美しき縞のある蚊の肌に来てわが血を吸ふもさびしや

五月 若山牧水

紹の蚊帳の波の色する透きかげに松千もと見る有明の

月 興謝野晶子

蚊のうなり精舎の中の静けさを揺かすごとくいとまな

きかな 金子薫園

◎夏の虫

語彙

○ざりざりす 夏の晝、草叢で啼いてゐる。ほそい淋しい聲に、晩夏のあはれが味はへよう ○晝の虫なく 風の死んだやうな

晝に啼いてゐる虫 ○世界の外に啼く如し 虫の音が自分の生活とは全く別なやうに思はれる時 ○かゝはりもなし

自分の生きてゐるといふことゝ、虫の啼いてゐるといふ事が何のかゝはりもないなど ○故郷の 歸省して聞いた 虫の聲をいふ時 ○裏畑の虫の音

さゝつて ○虫をさくくなり ○もろこしの苗の虫が啼いてゐるなど ○風わたるなり

○晝のしづけさ ○虫うる家に ○涼しき宵かな ○光る虫あり ○さゝつゝ立

てば ○心細さに 虫をきいて堪へがたく ○母をおもひぬ ○晝のおもひで 虫をきいて或る遠

い日の晝を思出した時また思ひ出した時が晝であつたとき ○何やらむいふ場合 ○晝をねてあり 虫のなく晝を、

○小雨の中の 虫の聲が小雨の中で ○虫さゝつて來し ○わかきすすゝきの ○露草の中 ○虫の音やみて ○草に坐して ○蜘蛛の巣に ○虫なきよみて ○人の立つ

らむ ○うらがなし ○さびしかりけり ○夏の雲見る ○白き雲 ○いづくとも

なくなきかはす○日のさせる草

「パラソル」は洋傘。

虫がしづかに啼いてるのを聞いてゐるやうなさびしさといふこと。

初夏のもつてゐる寂しさが、あらはれて居る。

むらさきのパラソル強く日に光る夏の眞晝の幽かなる

虫 北原白秋

夏の日の葱の畑に晝の虫しづかになけりかゝるさびし

さ 同

河を見にひとり来て立つ木のかげにはのかに晝をなく

蛙あり 若山牧水

植 物

夏の植物は豊富である。外光と一致した強い色彩が、其の葉にも花にも目ざましく表はれる。花の紅にしる、紫にしる獨特の濃い色がある。

◎青葉—若葉—夏木立

語彙

○青葉若葉 ○淺緑 若葉のうす緑 なるをいふ ○夏木立 緑樹のむら立 てるをいふ ○青葉のやま

越えて○駕の中に○男阪裏 ○女阪裏 ○青葉が下のさし潮を○山しづかに

○家ごとに鶏飼へる○湖うみぞひ小村○裏畑の○わが家に古き古楠の○大寺

のごと○やどり木も若葉する日の 「やどり木」は、木の枝などに生ずる特種の木を云ふ ○水白し○頂いたゞきの

古城ふるきのあとに○眞ひるの雲の○青葉の香かをり○森に路なし○緑の國青葉に満てる野を

大きき比喩したのだ ○人來り人去る山の○朝山の○日毎來て魚つるひとり○里人の

つくれる逕こみち○雨はれがたの○山見つゝゆく○登り路ぢの○白き花たえず零こぼ

れて○端山に立ちぬ○瀧ありと名のみ聞きぬし○倒れ木も倒れしまゝに

○葉分の光あをやかに日の光の青露しづく
初夏の日の静けさ。
日の色、若葉の色、鳥
なきやみては、天地
たゞ青い。

「海のやうなる」は例
の誇張法を用ゐたも
の。

この時の作者の心持
は静かに和らいで居
る。

日のさす青葉をそよ
だるに眺めてゐるの

來ては倚る若葉のかげや鳥啼きて鳥啼きやみて静寂に
かへる
窪田 空穂

紫の斑づきし馬をひさいでぬ海のやうなる若葉の木
立
與謝野 晶子

静かなる青葉の柱に人住みてわれ待ちてある思ひもす
るかな
水野 葉舟

物を見るあかるき心こともなく青葉の上にゆきかへり
つゝ
内藤 長露

清楚な感じに満ちて
居る。

静閑な夏の晝の趣が
浮んで来ればよい。

柿わか葉みどり照るらむ片山のはつ夏すきの従妹の家
よ
土岐 哀果
日のひかり青葉を透きてちらばれる兎の餌の白き晝か
な
金子 薫園

◎桐の花—梔子

語彙

○うす紫の桐の花の色である ○おち散れり 桐の花が散つ ○紫ぬれて 桐の花の紫が

ま 〇ほのかに匂ふ 〇雨のたそがれ 桐の花のさくころは 〇匂ひ流るゝ 雨に匂ひ

るやうに言ふのだが、實は雨の日 〇しめやかに 匂のかよひ 〇人のなつかし 薄紫の桐

には匂が著しく感じられるからだ 〇くるゝ 日の光 日没後のほの紫の
懐しい感じをよぶ 〇山かげに 〇若ければ かなしみの多い 〇くるゝ 日の光 空と桐の花とを對

照させ
 若き胸に○涙して○ある時の○あるかなきかの
 ○手紙かく○何がなし○ここかしこ○くちなしの花匂ふ夕ぐれ
 思つてゐるなど ○雨ふくむ雨を含むさま ○さびしさに
 合 ○海の聲する
 合 ○花のむらがり○花のひとひら○雨にこぼれぬ○ちり来るなり○風
 なき夕○瓶かめにさくまし○うらさびしけれ

窓際の青桐の葉から
 受ける反射を手にし
 て新聞紙を見た時の
 ふいと湧いた感じで
 ある。
 五句の「汗もちてち
 る」が独自の観方。

淡いさびしみを覚え
 た時の作。

●栗の花——合歡

手にとれば桐の反射のうす青き新聞紙こそ泣かまほし
 けれ
 夏の日はなつかしきかなころよく梔子の花汗もちて
 ちる
 桐の花そのむらさきが落ちちれり、さる路傍みちわたりの午後の
 湿りに
 金子 薫 園

語彙

○栗の花静かにけぶり
 ○梢あふぎぬ
 ○晝の林をひとり歩め

栗の花の白い色が、其處だけま
 るだ日の暮れぬやうに見えるさま
 ○日にけぶるらむ ある時ある處で見た栗の花を思出
 して、丁度此頃も亦以前のやうに
 咲いてゐるだらうと云ふのだ。日にけぶる
 ○林の隅 栗の花が咲いて、林の一角
 が明るくなつたなどいふ時 ○午後
 のあかるしやはり栗の花の白く明
 ○小鳥のかげの たそがれの栗の花
 などに配する場合 ○二日となりて
 曉臺の句に朝寒の二日となりし木槿かなといふのがある。
 こゝでは、栗の花がさいてから、二日になつたなどいふ時
 ○雨にぬれて 栗の花が雨にぬれ
 てゐるのだ、栗の
 花の時は多く小雨 ○栗の花ちる ○栗の花静かに揺るゝ 風がふいて
 ゐるのだ ○合歡の花
 を見いでぬ 雨つゞきで少時戸外へ出て見なかつたとか、うっかり
 して注意しなかつたひまに、もう咲いてゐたといふ時 ○合歡の花風にけ
 ぶれる あの肩刷毛のやうな花に風が
 して煙るやうに見えること ○日の午後 晴天の午
 後である ○涙もよほす 合歡の花を見
 て自ら涙の催
 さるゝ ○旅をおもひぬ 合歡の花を眺めながら旅
 行の事を思つてゐるのだ ○合歡は葉をいつしか巻きて 合
 歡
 は日が入ると眠るといふ、葉が は日が入ると眠るといふ、葉が
 おもむるに巻かれるからである ○二階より見る ○さしぐみて立つ 涙をうかべて立つ
 てゐるといふ意

○合歡の花ほのかに匂ふ ○さみしらに人は歩めり 合歡の花のさく午後を人
 がさびしげに歩いてゐるさま
 ○ほの紅う 合歡の花の
 色である ○五月はじめの外光 ○遠き少女を思ふ 遠い國にある戀
 人を思ふこと
 ○まぼろしに見ゆ ○こまかに雨のこぼれ来て 合歡の花には細かな雨が調
 和よく感じられるものだ ○う
 らなつかしく 心なつかし
 くである ○夢見る心地 合歡の花を見て
 の感じである ○合歡の花すがれて咲
 く あはれに見た
 などいふ時 ○合歡の花ちる ○おぼつかないけに ○風そよぐなり ○曇れ
 る午後 あはれに見た
 などいふ時 の林を過ぎゆく ○おだやかに曇れる晝の ○合歡散れば それにつきて
 思出があり、
 いる いるな
 心持がわく
 栗の花に對して、斯 栗の花に對して、斯
 う感じたと見てもよ
 栗の花四十路過ぎたる髪結の日暮はいかにさみしかる
 らむ

北原白秋

栗の花のやうな淡い
味のある作。

戀人の二人會ふべき
謀である。

「日にむせぶ」一首の
捉へどころ、こゝに
ある。

ゆくりなくとあるゆふべに見いでけり合歡のこずるの
一ふさの花
若山牧水

はかりごと教へて別る雨あがり合歡の葉をまくくれ方
の園
與謝野晶子

栗の花やうやく白く日にむせぶ哀しきものゝひとつふ
えけり
内藤長露

●牡丹

語彙

○緋牡丹ひばたん ○白牡丹はくばたん ○牡丹ばたん ○牡丹の花ばたんのはな ○牡丹花ばたんか ○紅玉こうぎよくの
○蕊しんの光ひかりや ○牡丹ばたんくづるゝ ○雨あめふるゆふべ ○日ひの出いづる時とき ○宵よひの灯ひかりのか
紅の玉のやうな色つ
やと、花をたゞへた

がやかなるをを灯あかりかげのああ ○玉たま沓がぬげば唐たうの宮女みやうむすめなど、美うつくく ○この一片ひとひらの ○美うつくさ

人に ○わが思おもふ子は ○病やまみて七日ななひの ○枕まくら一つに夢ゆめも來こず 一人ひとりを待つまちつに來こらず、
ると、夢ゆめも來こ ないといふ意い ○園うゑのうち樓たかどのの上うへ見み下くだすや誰たれ、 ○長なが者の館やかた ○さし擔たふ一ひと荷かの 植うゑ木き

どが鉢はち植うゑにした牡丹ばたんをいいく ○掛かけ鏡かがみその面影おもかげの ○誰たれの驕おごり ○花はなちるひひさき 大輪おほ花はな

おもたげにくにく ○昨きのうの笑わらを忘わすれず ○この兆きざしよからずといふ相人あいにんに 牡丹ばたんの散ちつた
つもかついで居ゐるさまだ ○掛かけ鏡かがみその面影おもかげの ○誰たれの驕おごり ○花はなちるひひさき 大輪おほ花はな

とトしたうら なひ者に云々 ○月つきに立ちくれぬ人ひとを待まちち ○車くるまとゝろに 車くるまの音ねの高たから ○御幸みゆきあり
し家の譽うゑを 御幸みゆきは行幸ぎやうきやうのこと、陛下てんかのおでました。 ○かゝりうどあまた養やしなふ「かゝ

客きやくのこゝに食く ○中なかにひとり ○白日まひるの燭しよくす 白晝ひるごとく、ともしびをつけたやうだと、牡丹ばたんの紅べにに日ひの
映うつつてあるのを形容けいけいしたのだ誇張かちやうした言方ごんかたである

○おん病うづ ○羅らかけよ 牡丹ばたんの花はなの紅玉こうぎよくの如ごとく ○玉階たまかの雨あめ 玉たまのやうに美うつくしくて光ひかりある階段かた
へ雨あめがふりかゝつて、そのかた

へに牡丹が咲いてあるといふ景色。禁庭のさまである。○孔雀病みて○廣庭の塵も動かす。春日閑かにして微風○
大き羽の蝶一つ丹にとまつたといふやうな時。

「身じろぎは、身を動かすこと。動いたら花がちらうといふことを三句以下のやうに云つた。」

「内裏にまゐりては來朝のこと。鴻臚館は外賓の接待處となつて居つた。」

「しら衣かへしは、白衣をひるがへしのこと。牡丹が根は他のものと換へることを得ない。」

牡丹いひぬ近うはべらじ身じろぎにうごかばかしこ王冠の珠

與謝野晶子

高麗人は内裏にまゐりて鴻臚館あした静かに牡丹花ち

佐々木信綱

わが歌にしら衣かへし舞はぬ子は牡丹が根にぞ斬りて

與謝野 寛

窓かけを二重まはせど妖艶やげる牡丹なほ見ゆ透影に

○卯の花 — 橘

金子薫園

語彙

○卯の花 野の家の垣根などに雪の如く咲いてあるのを見るのは、趣のあるものだ、あけぼのよし、夕ぐれのとどろしいほどよい、月夜はさらさら

○卯の花月夜 卯の花の白くさきみちだ ○卯の花くだし 卯の花をくさらすと云ふ ○花

卯つ木 花の咲いてある卯つ木の ○卯つ木原 卯つ木の生え ○卯の花垣 ○橘 上古、田道

人、始めて常世の國から移植したので、この人の名にちなんでタヂマ花、○香の樹 橘の樹を

○花たちばなの香を嗅げば 昔の人の袖の香ぞするといふ古 ○故郷の家の廣廂

○大宮の白木づくりを 白木づくりの 解、前に出づ ○紫の長かりし袖をつけた頃 ○昔の人よ

○橘の花さくころは ○風や昔の ○一いろに谷は日くれぬ ○黒木積む家の

夕ゆふどろし 灯とう黒木は皮のついたまゝの木 ○都客人みやこまらうど 都から遊び 〇ありしわが家の外廊そとくろわ
 外廊はそとがこひのこと。その破れた垣 ○城山に遊びし日さへ ○高草の中草が高くて茂つてある中
 根に卯の花の白く咲いてあるやうな場合 ○江の岸の家 ○門尋と
 る中を ○はね橋の綱むすぶ垣のぐべくつくれる橋。吊り橋 ○江の岸の家 ○門尋
 めわびて尋ねる人の門が ○そこそとなく ○行きかへり過ぎかぬる家の門門に橋が
 ひでを喚ぶやうな 〇誰が思出の ○右に左に ○小野の細道ほのくんと夜があけてま
 垣根に、卯の花が白く見 〇一すぢの流れに沿ひて花の方だ。
 初、二句は、橋の香香の樹は、橋の意。
 ばしい樹かげの意。 〇一すぢの流れに沿ひて花の方だ。
 「香の樹」は、橋の意。 〇一すぢの流れに沿ひて花の方だ。
 「名」が、こゝは上橋の」とあるから
 単に「香しい樹」と解

君ねれば灯の照るかぎり静やかに夜は匂ふなりたちば

奥謝野晶子

いた方がよい。遠居
 る人よは遠くはな
 れて居る人よの意。
 ほのかな感じの作。

灯の色があかるい。

紫陽花 — 葵 — 向日葵

語彙 ○静かなる小雨のひと日紫陽花が雨をふくんで重げに見えるなど ○草の戸さしぬ ○庭の
 茂みの ○庭の隅葉洩りの日かげ紫陽花が咲いて居る ○朝戸出や霧ふる山の ○断崖の
 上紫陽花のさく。潮風にさ ○垣間見の物の隙よりそつと ○朝舟にして岸の家の紫陽花
 〇垣間見の物の隙よりそつと ○朝舟にして岸の家の紫陽花

なの花 若山牧水

それとなく旅なる君も歸り來むものを戀しき卯の花月 水野葉舟

卯の花の垣根ぬらして雨すぎし灯ともしごろを訪ふ人 金子薫園

見上ぐるやうな時
 ○門川の岸草みえず○ゆふ化粧○姉がかかりし小手鞠の○たま
 くはれまの晴間の雫○水葵みづあひに似て、濃い紫色と白色とに咲く
 ○花葵○紅葵○錢葵ぜにあひ
 ○莖短く錢大の花さ紅白紫等 ○唐葵からあひに同じ ○あふひ祭この解、前に出づ ○葵かづら ○葵ぐさ ○
 かざしの葵 ○向日葵 「ひぐるまとも」 「ひまはり」とも呼ぶ。莖の高さ五六尺、花は菊
 ○椎の木陰の 薄くらがりに葵の花の赤 ○ふと見いでつる 紅葵な ○麥藁の屑は
 きためて ある近邊に唐葵が咲 ○五六寸水を出でたる水葵 紫色の花を著けてる。蜻蛉
 ○錢葵名のいやしげに ○こは朝々の眺め草 紅葵の目さめるば ○等閑なほざりに植ゑし
 がまよに向日葵が高くのび ○中垣もせぬ隣り家の 間に向日葵が ○庭井くむ時
 その井のほとり ○背戸の夕日に ○黄金日葵 がねひぐるま 黄金色の大輪の花 ○王者の如き 堂々と居
 の向日葵の花

るまを ○門の向日葵 草の戸のかたへ一もとの向日葵日を浴みて
 輝やかにわが行くかたも戀ふる子の在るかたもさせ黄
 金日向葵 典 謝 野 寛
 君戀し葵の花の香に出で、ほのかににほゆふ月のこ
 ろ 若 山 牧 水
 紫陽花に似ると人いふおほどかのもの沈みするわがさ
 びしさを 金 子 薫 園
 「向日葵は、日の照
 轉するから、方向を
 示せと云ふ事がこの
 歌の中に用ゐられて
 居る。
 おのづから、温かい
 葵の花の色が出て居
 る。
 「おほどか」は、おほ
 やうのこと。

語彙

○薔薇 はら 紅、白、黄とらんくに見事な色と、高い甘い香とを有
 ○野薔薇 野生のもの、花白く、こま

薔薇—夾竹桃

いか ○白薔薇 ○紅薔薇 ○黄なるぞよき ○薄紅うばら艶味があると共にイヤミもある ○香ほの
 けき ○野の夕月夜 ○靄白し ○君の手とれば戀人の手を取つたのだ。園の薄 ○送
 られて歸る野道の野ばらが咲いて、月が ○白磁の瓶の配合は少しわざとらしいか知
併し、黄がよつたの ○女樂師の家である ○オルガンの音 ○挿さまし ○リボン
も落ちついてよい の色の好みにも ○誰が歌の ○黒髪の ○一叢は君が植ゑつる ○哀しく白く
 咲き初めて愛でつる人の ○短き詩を西洋の短詩であらう。ソネットなど、低く ○
さがに似て 窓かけの水いろ涼し水色ぎぬの窓かけが、見 ○置きならべたるいろ／＼の花さく
てある ○月ありあけぬこの解、 ○卓の上大きい花瓶に薔薇が ○うき人の隔てど
さま ころをふとこの薔薇の花 ○透垣すくなく結んで、見え透くや ○戸をくれば ○わが兄と
に見たといふのだ

われと培ふ ○眞砂路の眞砂がくれの白茨白茨は、白 ○あはれ君なし愛でし君
とき ○わが愁ほのかに咲きぬ白き花やせて、さ ○夾竹桃葉は笹のやうで、花は桃の
木から摘み取ると、うなだれやすい。弱いもろい花だ。丁度うらさみしい美人 ○青き葉の中
を見るやう。葉はスツキリとして青く強い。かよわい花を護つてゐるやうだ ○青き葉の中
 のうす紅 ○強き日の光に ○花のあえかさ花のかよ ○若き繪師その一鉢を ○
畫室の隅に ○灯をうけてまぶしげなるが ○葉をめど ○その一輪は黄金
髪 うつくしき子に金髪に花の色葉の
色かふさはしい。
 二、三句、萎れてか
すかに息をまてゐる
さま
 淡い情趣を覺えしめ
る作。
 花薔薇しなえて微ほに息づきぬむかしの人のくちづけの
 香に
 奥謝野 寛
 髪あげてさゝむといひし白ばらものこらすちりぬ病め

しならしい女心が寫つてある。

「ゆふじろみ」は、白いさうびが夕方の色をうけて青白く見えること。

瀟洒な感じをあらはさうとしたもの。

る枕に

山川登美子

化粧してばらに水やる夕ぐれは忘れし人を待たれつる

かな

片山廣子

おもひでは薔薇の花のゆふじろみひと雨すぎしほのか

さよ君

武山英子

妹が家の夾竹桃よひと花は垣のうへより笑つくりけ

金子薫園

●撫子—常夏

語彙

○濱撫子濱にさく ○川原なでしこ川原にさく ○大和撫子 ○韓撫子 ○常

夏なつ野生のなで ○庭もせに庭もせ ○淺茅あさひにまじる ○朝月夜 ○露そへて ○草刈

る日 ○濃き薄き花の濃紅、うす紅 ○誰が家ぞ ○つちかひて ○愛でしひとりの ○

通ひ路ちに ○君と来て遊びし濱の ○磯山のさらく砂に砂の白のになでし ○

断崖きりざしに沿ひて汽車ゆく ○日でりつゞきの ○渚なづさの雨の ○青波あをなみのしぶきをう

けて青波と紅花と色の配合がよい ○小島がよひの船見つゝるぬ ○花の真紅しんくに ○釣舟つりふねに來

るを辭いなみて ○小草履の真砂はらひぬ ○庭戸にほどより濱へ出で行く ○夕ゆふされば

衣きぬも著かへて ○夕富士ゆふふじのさま ○草がくれ水 ○髪かみの香と衣きぬの匂ひと ○摘め

ば戀こひしき戀しい思出おもいでがあるのだ
「瀬の渡り板」は瀬に渡してある板いあや

なでしこや瀬の渡り板ふむとときにあやふしといふ馬洗

ふしといふしはあぶ
ないと言ふこと、瀬
のいたか何かに撫子
の咲いてゐるのを見
てあぶなく足を逸
らさうとしたのであ
らう。

鉢の常夏が、細窓に
斜めに日を受けて居
る。

◎百合

語彙

◎小百合 百合と同じ、さば ○百合 ○山百合 山中に咲く百合。花 ○野百合

ふ人

日こそいま西に傾け裾野みちなでしこ生ふる高原をゆ
く(赤城山に遊びて)

平野萬里

常夏は羞しりそめしその頃のつま紅の手に摘みにし花

武山英子

常夏は妹と見る花むかひるて見れどもあかず夏のなが
日を

金子薫園

◎姫百合 ○鬼百合 ○笹百合 葉が笹のやうなので、この名があ ○黒百合 花が薄風い
この名 ○鹿の子百合 花白くして、紅の鹿子模様あ ○月に揺げる ○百合の園 ○百
合の戸 百合のさい ○湯肌 浴みしてゐる肌 ○少女な
りし日 ○天の香 地上のものに ○見てあれば ○人ふたり ○翅は白し 百合の精
ふ ○そいろ心に ○清水のほとり ○分けて植ゑつる ○小松のかげの ○庭芝
の露のみどりに 百合の花の白い ○うつむきてまだ咲きやらぬ ○草のゆふ闇
○星あけ初めし ○朝の氣の ○そよ風の ○あこがれ出でし ○その昔夢に夢
みし ○澄める瞳 その人が百合を ○あゝ聖書かたみに讀みし ○絹の朶の ○
その日そのひと ○朝の戸にまづ見るものと 百合が咲いてゐるのだ ○戀びとのごと

「夜寝て見たいものは一といふ意。」

やさしい、美しい景色。

「青鷺づれ」は青鷺が幾羽かつれたつてゐるさま。白百合と青鷺と色のうつりがあつさりしてよい。四、五句は、何不足ないさまに目を瞑つた人の死顔が思ひ出されるといふ。室内にこもる高い百合の香。

山百合の幾千の花を折りあつめあつめし中にひと夜ねてしが

佐々木信綱

朝靄やひとと百合にまつはりて露とむすぶをあはれと見るかな

窪田空穂

白百合の白き畑のうへわたる青鷺づれのをかしまゆふべ

與謝野晶子

百合の花しろさを見ればむかし人その死がほの足らひしおもふ

吉井勇

蒸す百合やもたえのはてにややすう寝るひと時もある

まろ

れしかな

○畫顔—ゆふ顔

金子 藩 園

語彙

○畫顔の薄紅はのに○通り雨一しきり降つてすぎゆく雨 ○鄙路の畫の草いきれ

「草いきれ」は草が日の熱氣に蒸されて、暑苦しいにはひを放つて、暑苦しいにはひを放つて、
○乳しぼる朝夕の逕牧場へ乳搾りにゆく路 ○青芒あをすきそよげる根

方○草刈りに倦みては息ふ○草堤○川船の白帆動かす夏の眞畫 ○田舎馬車

かよふ田中のなだら路○乗合のいぎたなきさま乗合の客が熟睡してゐるさま ○雨見てありぬ○この里の訛なまりをかしき○藥賣また衣賣きぬうりの○温泉道○心まちに待ちし

日くれて○此あたり裏も表も○川づらの宿の灯おそし○葉分の風の葉を吹き

わけ○隣より蔓つるはのび来て○麓路となりて日くれぬ○縁えんの夕餉ゆふげの膳に夕月が涼しう

○さし櫛落ちし○櫓に葺きたる 舊五月端午の節あやめを櫓に葺く古例がある。今でも月來ぬればな五月晴はれする。自然のいきよとして、人の迫るころである。○小板橋の里小川などに架つてゐる。かたばかりの小板橋の下に、あやめ野趣がある。○築土くづれし 築土は、瓦屋根をやめ四五本、ちよろく水に出てるなど、野趣がある。○築土くづれし 築土は、瓦屋根を土にあやめが咲いてゐるといふやうな場合、荒寒たる光景に、自然が技巧を弄するのがなかしい。○江の朝晴の○池の水さらさら落ちて里川の○此里の橋に名もなし○潮來出島の 真菰の中に菖蒲咲くとはまをらしいといふ俗語がある。潮來出島とあやめとは調和がよい。○舟つく宿のおばしまに○舟人呼べば○言づて、まじといふ意。○宵々の雨の佗しさ○小笠の子水を涉りぬ 水淺くして腰を湿しない、里の少女、短き裳裾をかよけて小唄など。○家鴨を飼ひて翁と少女と住んでゐる。水はたに、あやめ○紫のその元結の 色にあやめか杜若が家鴨にあらされながら咲いてゐるなど。

模様水が流れて、杜若が咲いて、○扱帯の染の濃紫 扱帯は一幅の布を善い加減なだけには杜若の色の濃紫に染めたもの。扱帯は一幅の布を善い加減なだけには杜若の色の濃紫に染めたもの。

事もなげに言つて沁沁させる作。

淡彩の繪のやうな趣。

夕がた、杜若に灯のさした景色は涼しいおツつけいかにも旅役者の來さうな宿のさま。

臯月來ればひと年人と刈りにける菖蒲かをりて手にありと惑ふ 窪田空穂
水こえて薄月させる花畑にあやめ剪るなり戸いでし人は 與謝野晶子
旅役者暮れて著くてふ舟宿に杜若すいしう灯のともりけり 平井晩村

◎蓮—藻の花

語彙

○蓮はぢすの佛くさいのきまりきつたのよりの花にまつはつて離れない。池 ○花蓮 ○白蓮 ○紅蓮
 ○蓮の花船蓮の花片を水に浮かせて、船と見たのだ ○卷葉浮葉 ○朝々あさくを ○朝舟 ○夕舟 ○舟は見え
 ず ○水馴この解棹この解前この解に出づ ○蓮池 ○古池 ○池にひく水 ○池殿いけどの池の畔の家のいふ ○蓮田蓮の植
 田 ○松の根がたに ○おほ寺の ○廂ひましのかげの ○み寢覺は ○うすもの、袖人
 輕装して、池のほとりに立つてあるさま ○ふとさめて ○人の戀しき ○この夢やらむ この夢を人にや
 ○藻の花 ○花藻浮藻 ○黒き羽の蜻蛉あきつとまれり 藻の花の白 ○水片澄める ○岸
 の色 岸の草の色などが ○松原を出で、舟橋 ○水の門とさす ○刈りすてし路の藻
 の香の ○たそがれの雨 ○ふる沼ぬの森の ○君が門とのまへ 藻の花の白き中をわけ
 いふ ○素足すあしにからむ 藻草のか ○朝雲の映り映らぬ 花藻草生ひ廣がつて小沼を掩ふや
 場合 ○素足すあしにからむ 藻草のか ○朝雲の映り映らぬ うにしてゐるので、とるくの空

間の水に朝雲が影を落してゐるといふ ○晝の月あり 藻の花
 やうなのを映りうつらぬといつたのだ

「花藻のふさは長さ
 二三尺もある。それ
 を、藤にかけたとい
 ふ、海の日これにさ
 して翠色したる如
 きものがあらう。」
 「藻の花のさみしさ
 と人を求めるあは
 れさとが調和してそ
 ろる哀愁の情を覚え
 しめる。」
 白い花に黒髪を取合
 せて、そこに情趣が
 ある。

蓮き剪りに來よと玉づさえし人の船より來しをもてはや
 しけり 與 謝野 晶子
 月の夜の廊らうに船くる海の家すだれにかけぬ花藻はなものふさ
 を 同
 藻の花をわけても見つる水底みなそこに人の面おもかげありやと思
 ひて 窪 田 空 穂
 藻のかをり四邊しへんをこめぬ黒髪くろかみのにはひよりや、淡けれ
 どよし 吉 井 勇

◎林檎 莓—櫻の實

語彙

○草いちぢの紅い實、普通食用 ○木莓種多く黄な實一 ○野莓 ○山莓 ○蛇莓
 ○紅莓 ○初莓 ○莓賣 ○小籠の中に摘みためて ○召せ莓 ○いつも來る子の
 ○やさしき聲を ○温泉の宿の晝寢のころを 莓めせとさまたれた。莓の色の ○白
 き皿に ○え忘れず ○ふくめば戀し 戀の人などしのぶ ○その夜の人の ○卓の
 上 ○つややかに林檎と頬と つつややかにしは、 ○宵の灯に ○語りつき聞きつぐ
 三人座にむきかけの林檎と飲 ○對ひ居て ○ナイフとる手の ○荒けづり木筥も
 うれし 筥をあくれば、先づ ○敷きし藁さへ ○薄月に靄うす色の ○林檎ばたけ
 の ○葉かげに高し ○わが戀は ○銀の笛 ○肩あげありて ○聖堂の森は今な

し ○落しては拾ひしふたり ○はらくと葉のみ零れて 枝をゆすつて見るのに
 櫻の實は落ち 〇玉なす小石 ○濃むらさき 櫻の實の熟 葉のみちりて、肝心の
 て來ぬなど 〇玉なす小石 ○濃むらさき 櫻の實の熟 葉のみちりて、肝心の
 情味がいかにも初々 手づくりの莓よ君にふくませむわがさす紅の色に似た
 しく表はれて居る。 れば 山川登美子

「耳環」は耳へかける
 環。櫻の實をそれに
 とつたとのこと。上
 品なすさびである。
 「北陸前」は、北國の
 陸前と云ふ義。

「市すぎ」は、青物市
 のひけた後のさま。

二寸ほど高かる人とさくららの實耳環にとりし庭おもひ
 ゐぬ 與謝野晶子
 林檎食へば北陸前の十月の林のさまの眼にもうつり
 て 笹田空穂
 市すぎや天幕はづせば紅林檎玉菜にかゝる晝小雨か

卓に人なきかをり
は、卓上いちごのみ
残つて、人氣ない一
種の氣の香りがまた
こと。

な
罇入りし白磁の皿の紅いちごのこりて卓に人なきかを
り
金子 蕪 園
同

夏 雑

夏季のすべてに亘つて、以上の部類に属しない性質のもの
を収める。夏の歌は或る偏し易い性質を持つてゐるから、
廣く眼を自然と人事とに注ぐことをすすめる。

語彙

○夏の雲 銀色に輝いてゐる雲が、鳥の形をしたり
野も青葉も雲も山もみな 人の形をしたりしてゐる
銀色にかざやいて見える ○夏のあはれさ ○行水の肩よく風 行水してゐる時肩
見草さく川添を ○つゆ草どもの 指したのだ ○どくだみの花白き夕ぐれ ○月
黄に濁る日の 黄に濁つて 見える日光 ○山の鳥来て ○夏やせを吹く 夏やせの體を
風がふくのだ ○避暑地

の夕 ○晩夏の雲 ○晩夏の街 ○海邊の 月夜もあるだらう、風の日もあ ○地平のは
てを ○水平線に ○夏の港の ○はるかに淡し 船のゆく ○宿酔の頬に 朝の海の
○汝のことも 交りけり 何かいるいると思出さるゝな ○青鷺のとぶ ○みそさしい
なく ○あはれとぞ見る ○あさき夏かな また夏になつて間 ○ふけやく夏 晩夏に
る ○水の邊の ○遠の少女よ ○夏の旅かな ○まどの明りと 月見草の同じ色な
の丘に立つ ○雨すぎて ○高き樹の梢に ○林の奥に ○わが前を 街をゆくと小さな
つて過ぎ ○湯を出で、 夏の夕の町の どよみをきく ○石鹼工場の煙突の ○煙ながるゝ ○新し
き家 ○まちわびて立つ ○石の河原に來てあそぶ わが鮎の時分の川原 ○河骨の
さく 色若しくは朝の眼にしむばかりうるはしい金色など ○おもだかの花 水草である多
く水田などに

小さな白い花
をつけてゐる ○秋近し野菜の畑の○もろこしの苗○青きかなしみの物を見てそ
かなしく見られたのだ ○かへりみれば同じである ○うら淋しけれ○夏をかなしむ
水郷の趣が軽い描寫
の中に動いて居る

葉

與謝野晶子

この廣々とした平原
は是非とも武蔵野で
なければならぬ

うす濁る地平のはての青に見ゆかすかに夏のとゞろけ
る雲
若山牧水

魚市場に立つてその
生々した魚を眺めな
がら、遠く海に飛ぶ魚
の翼を鳴して飛ぶさ
まを想像したのだ。
夏渡せのあはれを詠

阜月の海飛魚するなる晴れやかなのさま見ゆ朝の市場に
立てば
前田夕暮
夏の帶砂の上にながながと解きてかこちぬ身さへ細る

んだもの。

と

吉井勇

盛夏の晝ころの日の
色が見えやう。

樹の間より照りかゝやける夏の日の青き野を見て林を
ゆけり
金子薫園

京都に入つた時の第
一印象である。

晩夏の京都に入れば蒸すごとき暑さのなかの青き山河
同

(三)

秋

○秋は四季の中で、一番大氣が澄み徹つて朝
 晝夕その何れにも朗かなひろくとした心持
 を、十分に味ふことを得せしめる。秋は、此
 の朗かな澄み徹つた氣の溢れて出来たもので
 ある。空を見よ、鳥のこゑに聴け、さては、林を
 わたる風の音流るゝ水の音天地たゞ秋の氣が
 満つると言つて可い。からくと乾いた地に
 露おき霧たちて、しみぐと潤へば、蟲なきて
 花草、滴るゝばかりの色に咲き満つ。水草の紅
 葉、夕陽に榮え、菊の花しろくときやかなる
 月光の下にある。秋は最も詩思の動かされ易

い時である。
 ○さびしいとか、哀しいとか云ふ情緒のみ先
 きに立つて、其の流れ動く心のはたらきの閑
 却されてゐるのは、内容のない空虚な作であ
 る。それが本統に淋しいとも哀しいとも感じ
 ないで、然う云ふ型から詠まうとして出来た
 ものは、最も避くべき傾向である。作の第一義
 の作者の態度が眞實であつたならば、さうし
 た傾向を趁ふべき譯は無いが、因襲的の慣習
 は恐るべき勢力を以て初心者の弱點を襲はう
 として居る。西洋の詩人は多く秋を樂觀して
 詠んで居る。思想のおもむく所に各自の個性
 を發揮することを忘れてはならぬ。そこに本
 統の歌の味がある。

時

令

初秋、仲秋、晩秋には夫々特殊な景趣がある。初秋と晩秋
 には特に際立つた遠ひを認める。初秋の水氣のある天地
 と晩秋の乾いた天地とは全く情緒の赴く所を異にする。

◎初秋

語彙

○秋立つ日 空の色も昨日に變つて、高く澄んだやうに見え、風の音ざわわくと鳴
 りて、人の胸を清うす。初秋の曉は快感を覺えしめる。而も、此の快

感に、初夏のそれとは全く趣を異にして居る。初夏は目に希望の色が満ちて、
 前途が耀いて居る。初秋の前途は荒涼である。荒涼は死だ、寂しとも寂しい。 ○秋は來ぬ

○立つ秋の ○今朝の秋 今朝立つた 秋といふ意 ○風さやさや ○風のおと月の光りの

ふたつながら秋のけはひを覺えしめるものがある ○山見れば 山高く聳えて秋と云ふ感じ ○ありなしの雲 あるか

の雲をい ○空を仰げや かく友を促す場合だ。あの高く澄 ○ひたひたと潮さす岸の

潮の音もすて ○一葉二葉 木の葉のこぼるる場合にいふ ○秋めきて 秋らしく ○秋のけはひ 秋の

氣色

である紫式部日記の書き出しに、「秋のけはひの立つまゝに土御門殿のあたり、言はむかたなくをかし」とあるのは、秋のけはひを、よく用ゐるなしたものの、景趣、先づ見えるやうだつりしよ

○釣葱つりしがまゝに涼しみを呼ぶもの。それが秋が来て、そのまゝにかゝつて居るといふのだ。斯る光景はよく目睹する所 ○花賣の聲 曉のころ、床の中などで此涼しげなちよるく流るる川 ○白々と巷は明けて 秋の曉の大氣は白く感じがする、此白い大氣の音は秋の大氣の中に流れて 〇たい何となく 〇庭草の白きを 一輪摘んで秋を味ふは秋らしい感じを興へしめる 〇下り立てば 川のほとりなど 〇遠きはかなき思して 秋の感じ 〇み名よびて見つこの寂しさをまぎらすと云ふ場合 〇水にのぞめる 欄干の 水樓の欄干のこと

うつら病める日 病むといふ程にもなく、 〇君おもふ時 〇はかなかりし君の一生の 〇いつか眼に涙ありけり 秋の天地のさびしさに對つて、涙のおのづから臉をぬらすといふのだ 〇何故ぞかくは悲

しき 〇山より野より 〇木の間に 〇何のけはひぞ 白く風が吹いて来た云

「澄みてするどき」の一句、尤もよく秋の感じをあらはして居る。

四句の「せちに」が一首に利いて居る。初二の句のやさしい情致は初秋にふさはしい感じだ。

情景見るが如きものがある。

「石とつれなき」は、石の如く情の冷やかなること。いかにか心弱くなつたかと察せられる。

秋は來ぬ杜にこもりて啼く鳥の澄みてするどき響を聴けや 窪田空穂

君が頬の涙ぬぐひし日のおもひせちに覺ゆる初秋の風 相馬御風

初秋や暮るゝ草より十ばかり小鳥の立つをおどろきし君 平野萬里

秋立ちぬわれを泣かせて泣き死なす石とつれなき人戀しけれ 若山牧水

罪を犯した覚えはないが何か科人のやうな淋しさを覚えるると云ふのだ。
初秋の静かな心持を出さうとしたもの。

秋は來ぬ犯さぬ罪のむくいなるこの淋しさをいかにすべしや
前田夕暮

こゝろいま静けし見れば青草はやゝに黄を帯び秋となりけり
金子薫園

◎秋の朝

語彙

○さやかかなる 物の響などいふ時である、秋は世界のしづまりかへ、朝の野にしてあるのを見たなどいふ所 ○胸に沁む香の 香が冷たく胸に沁み、杜の朝かな ○霧に明けたる 霧のかよつてあるまゝ ○冷々と ○秋の夜は霧より明けて霧の白く明ける所から、夜は霧から ○昨夜よりの雨晴れむともせず ○昨夜のまゝなる

虫の聲かな ○後朝の 昨夜は戀人を宿したが今朝はまた ○人の聲して 朝霧の中をゆく人の聲がし

て秋の野の朝は漸く明 ○室の朝 秋の朝は室の總ての物がみ ○青貝摺の光るつめたさ け離れようとしてゐる ○青貝摺の光るつめたさ 床の植木の臺 ○こゝろ静けし ○しみじみと 秋といふ感じ ○物に親しき 心が何物の背貝摺など ○汽車の長鳴 長く汽笛の鳴ること ○汽笛はかなし ○うすら寂しや ○もののあ

はれを ○雨となりけり ○秋の朝 ○かなしさに ○床に眼醒めて ○このかなしさをよくこぶ心 人には時になしさを歡び ○朝の鳥なく ○目ざむれば ○静けさ過ぎし 静けさ過ぎて寧ろ寂しく ○風をよぐなり煙草の味のしみじみ舌 ○朝

顔の花など見ゆる ○鉢植の ○つる草ゆれて
新しい感じだ。作者
秋の朝卓の上なる食器らにうすらつめたきかなしみぞ

昨夜戀人の訪れたことなどを想はせる。

秋らしい、豔味がある。「うなじ」は頸すぢ。

「かなかな」は鯛。フレッシユな感じがあら。

「三十路するよりは三十歳を過ぎたと思ふ故などの意。

這ふ

前田夕暮

わすれゆきし女の貝の襟止めの白うひかれる初秋の朝

同

秋の朝うなじに薄くおしろいの残れるを見つゝ別れかへりぬ

若山牧水

かなかなの啼きいでゝわが書きさしのインキのあとのさびしき夜明

内藤晨露

朝顔のちひさ小さな花はうらがなし戀しき人の三十路するよ

與謝野晶子

◎秋の夕—秋の夜

語彙

○秋のゆふべ 風の音、虫の聲、その夕暮に於いて、秋の心持が最もよくあらはれる。枕草紙に、秋は夕暮とをかしく、あはれなる趣を春の曙、夏なる筆に寫されてある。○秋の夕暮 語の成立上夕暮はゆふべと云ふ

「くれぬ」は今暮れたばかりといふ場合で、半過去だ。暮るゝといへば、現在である。殿めしき森に秋の大日の落ちる時、暫時、壯美の感にうたれる。○秋の夜 ○秋の

宵 ○秋の夜半 ○長き夜の 九月に入つて夜の長くなつたのを覚える。長月といふのは、夜

秋の夜長の趣をよ。○夜は長し ○夕小雨 山鳥の枝ふみかゆる夜長かなといふ蘇村の句は、

く言ひ現してある。○夕ぐれびとは 夕暮の景に對してゐる人、又は、その景の中につままれて

哀感をさそふ。○遠きより 夜の闇は、遠き野の末か ○白衣の衣すれ 夕風の音のさやかなるを、白妙

るにたとへ。○ゆふ鳥の聲 夕ぐれになく鳥の聲で、さび。○夕まどひ 夕ぐれ思ひみだれて

○ゆふべの思ひべいつにまして秋は夕
 の營みにつかれた人の幾群は、頭重げにうなだれて、わが家にかへるのである。之れに
 秋の夕といふ背景があつていよく深く淋しさを感ぜられるのだ。額ひたひである。○巡じゆん
 禮れいを子に持つまじき巡禮の子の哀れなさまを觀て、
 斯くしみみくと感じたのである。○笛の歌にて、月は草山のうへに出
 き清く光つて見える。かゝる時に、村の若者な
 どは、笛をとりあげて、歌口をしめすのである。○落日の黄きなる光を
 も黄である。黄は紅やみ
 どりにくらべてさびしい。○鐘おほき古き都の
 奈良や京の都のこと。○更けゆくや○語りはや
 めじ燈を中にとりかこんで、長き夜
 を茶話は、ますく佳境に入る。○ともし火の光りなす
 更けゆくにつれ氣は冷えて
 のやうに冷たく、
 牙えてくるのだ。○市場いちばの中に○わが枕重き夢のせ
 るしい夢ばかり見て、オチくれ
 つれてかういふのだ。○思ひ寢の○旅の夜のごと
 秋の夜は孤獨の
 感にたへない。○つくぐくと
 ○水の音する○泣きたまへ涙あるまはこれ感情の切
 なる聲である。○明日あすを思へばなほ夜の
 淋しさに

氣が減入る
 といふのだ。○戀を得て○いよくさびし
 物さびしく居るさま
 が見える。
 秋の夜のさびしさが
 冒外に味はれやう。
 小さな芽の色があか
 る。い灯あかりかげに見え
 事こと兩國の橋の上の即
 おどけたる一寸法師まひいでよ秋の夕べのてのひらの
 うへ
 興謝野 晶子
 撞きやむな秋の夜鐘とおもひつゝ五つとまでは數へた
 りしか
 窪 田 空 穂
 机の上植木の鉢の黒土に萌えいづる芽あり秋の夜の灯
 よ
 若 山 牧 水
 小蒸汽の笛のかなしき兩國の橋のゆふべの秋のかなし
 さ
 興謝野 寛

「さまざまの象は、いろ／＼の幻象であらう。秋の夜静思のさまが想ひ浮べられる。天地はわが悲哀と月光とに満たされてゐると言つたのだ。」

夜は長し何ともわかぬさまざまの象帷かたちとほりに流れながれて
尾上 柴舟
あめつちにわが悲しみと月光げつくわうとあまねき秋の夜となり
石川 啄木
にけり

◎暮秋—ゆく秋

語彙

◎暮秋くれあき 身一つを歎く絶望で、どこ迄も深刻である、山また野蕭條として何の眼を遮るものもなく、其行くへを考ふれば、冬枯！荒涼！凋落！落寔！而
◎暮るゝ秋暮れつゝ 秋くるゝ、ゆく秋、秋くるゝ、日九月盡である、今ぞ秋ゆく夕べの鐘の音が野の間にきえゆく、秋ゆく夕ぐれ、けそりくと行く小流の音、◎暮の秋俳句に用ゐ秋の別れさびしい事ばかり

多かつた秋も別れとなれ、ばさすがに惜まれもする、◎秋を惜しむ、霜もおくやうな寒い静かな夜半の鐘の音に、◎九月盡秋の終の夜潮よしほの音ので淋しい胸にひびく、◎雲は南へ、◎草木みな露にしめれる、◎戸に倚れば、◎ゆく水のゆくへあやなし、聞の中ふかくさびしい水、◎夜ひと夜の一晚中、ゆく秋の雨涙しきりに、◎此秋の思ひ出や何ゆく秋の夜のさびれる事が多、◎うすき日のかげにゆく秋の日は、哀寂の感、◎死ぬべかりける命もと、◎ひとり風さく、◎君おもひ寝むなつかしい人を懐うて、今、◎あすやいかにこのしさに明日あるを思へばな、◎松多き家松風の間に鳴る音はさびしい、◎わが胸を訪へどこた應へず淋しほわびしさはますのである、◎つづく戀しゆく秋の夜のさびしさは身、◎遠く黄ばみし日の落つたへない時、◎野に立ちて、遠くこれを望めば、涙そとるにまつ毛をうるほす、◎あはれ神よ

さびしい時はやがて人の心の清浄にかへ
る時かゝる時神も心から祈られるものだ
手ずれたる聖書の表装おびて聖書は基督の教
義をしるした書
○天地はさやく鳴れり
野社のやしろや榛はんの木折れて晩秋はんしゅうの來しと銀杏いんぎふの葉の吹かれ居
る

與謝野晶子

その冷たい夕日もき
えゆかうとする。

日
くれ方の竹の林にわれ立ちぬ背をながれたる冷たき夕
暮

前田夕暮

君をおもへどうら
さは紛れないといふ
のだ。風の夜はさび
しい。

秋くる、林の風の夜ひと夜はうらはかなしや君をおも
へど

土岐哀果

「安らげき死」と臥床
へいそぐことをかく

安らげき死にや急ぐと晩秋くればきの空ゆく鳥に眼をとめてみ

意味がある喩へ方が
した。

る

尾上柴舟

「刈りみ刈らずみ」と
いふのに、荒涼たる
曠野のさまが見えや
う。

松あればそこに墓立つ黍原きびはらや刈りみからずみ秋ふけわ
たる

金子燕園

天象

秋の空の高く、空氣の澄んで明るい景趣は、いつ見ても歌
の思をそよられる。歌は出來ないでもその空のもとに立つ
てゐるだけでも既に詩である、繪である。

◎秋空—秋雲—秋晴

語彙

○澄みて高し秋晴れの空は澄みに澄んで、一碧たゞ大湖の水の動
かざるやうだ。又、仰いで限りもなく高いと感ずる。○濃みどり

の秋の空の○露をふくみて日はのぼれど、草の露未だかわかない。
色である。○富士に雲なし秋空高く晴れ渡つた廣
に冷えて、すがく。○富士に雲なし秋空高く晴れ渡つた廣
しいものがある。○日ごと風あり空は澄み